4a
810
昭2

八波則吉編

現代國語讀本

(修正版)

九卷

東京開成館藏版

41430
教科書文庫
4
810
41-1927
20000
90697

教科書文庫
4
810
41-1927
2000090697

文部省檢定濟
昭和二年二月十五日　中學校國語科用

八波則吉編

現代國語讀本

（修正版）

広島大学
教
90697
図書

東京開成館藏版

広島大学図書
2000090697

中等教科書協會
閲

資料室

4a
810
BB2

現代國語讀本　卷九

目次

一　明治維新大改革の目的……徳富蘇峰……一
二　大空に日あり（詩）……沼波瓊音……六
三　大衆文藝……千葉龜雄……一〇
四　人生の熱愛者……安倍能成……一六
五　愛國の本義……尾崎行雄……二四
六　穗積先生の業績（自修文）……鳩山秀夫……三
七　近代の和歌（和歌）……三七
八　百虫譜……横井也有……四〇
九　新島守……（增鏡）……四五

一〇 大原御幸……（平家物語）……五二
一一 競技の體驗（自修文）……六〇
一 柔道……六〇
二 走高跳……六三
一二 殘暑……清水濱臣……六九
一三 擬古文斷片……七〇
一 おのが歌……加藤千蔭……七〇
二 松のとぼそ……村田春海……七一
三 蹴鞠のわざ……伴蒿蹊……七二
四 秋の山田……藤井高尙……七二
五 あまの住家……中島廣足……七三
一四 鎭西八郎……（保元物語）……七四
一五 兒が嶽……瀧澤馬琴……八二

一六 近代の俳句（俳句）……八六
一七 俳話だより（候文）……末松青萍……八八
一八 短き詩歌……佐々醒雪……九三
一九 動物園の獅子（自修文）……厨川白村……一〇二
二〇 鷲と鳩（詩）……藤森秀夫……一〇七
二一 最後の松陰……高須芳次郎……一一
二二 世界の四聖……高山樗牛……一一九
二三 釋尊とト翁（詩）……土井晚翠……一二三
二四 親の愛……西田幾多郎……一二五
二五 文學と人生……藤井健治郎……一二四
二六 秋姿の瞑想……綱島梁川……一二四
二七 綱島梁川氏を弔ふ（自修文）……石川啄木……一六〇
二八 理想と實現……阿部次郎……一七二

現代國語讀本　卷九

德富蘇峰
名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年生、貴族院議員、國民新聞社長

昭和四年より大毎社社員

一　明治維新大改革の目的

德富蘇峰

明治維新大改革は日本帝國の自覺であつた、大和民族の自醒であつた。維新大改革は決して封建制度の廢止や將軍政治の顚覆を目的としたものではなかつた。封建制度の廢止や將軍政治の顚覆は、單に帝國が自覺して其の時務に順應するのに際して、必然の結果として生じた出來事に過ぎぬのである。

然らば則ち維新大改革の目的は何であつたか。概括的に之を擧げれば、(一)建國以來の國是である一君万民の本體に立返ること、(二)擧國一致の力を以て世界列國と對立すること、(三)國力を增進し

て帝國の天職を遂行すること、此の三大綱であつたのである。

維新大改革に際して、或者は建武中興の古に則らうと主張したが、「それは規模が狹小であるから、宜しく神武創業の古に復すべきである。」とは、當時に於ける達人の意見であつた。

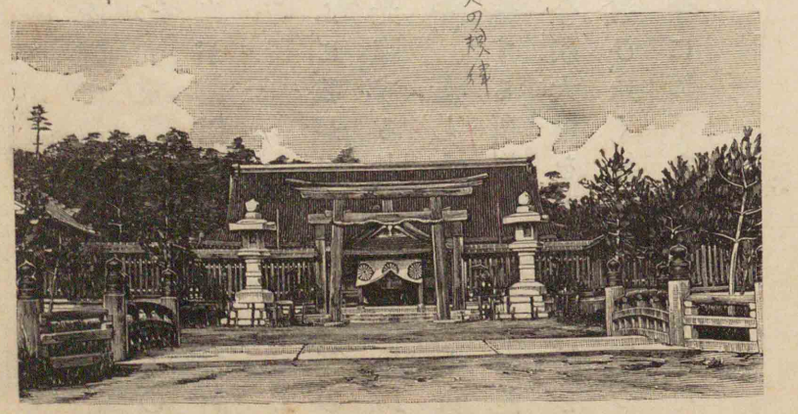
神武天皇（竹田久遠謹作）

維新と云ひ、或は王政復古と云つたが、しかもそれは異字同義で、復古は即ち維新であり、維新は即ち復古であるのである。神武創業の古に復ることは王政の維れ新たな所以である。固より古に復

るとは其の形式に就いて云ふのではなく、其の精神に就いて云ふのである。

然らば神武創業の精神は如何なるものであるか。

「それ大人制を立つる、義必ず時に從ふ。苟も民に利あらば、何ぞ聖造に妨はん。且當に山林を披き拂ひ、宮室を經營して、而して恭しく寶位に臨み、以て元々を鎮むべし。上は則ち乾靈國を授くる德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふ心を弘む。然して後、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて而して宇と爲す、亦可な



橿原神宮

らずや。」（原漢文、日本書紀）

是は神武天皇が東征後六年に橿原宮を建て給うた時の令の一節である。そして、此の意義を更に異なつた文字で説明したものは、崇神天皇が群臣に下し給うた詔である。

崇神天皇
第十代

德富蘇峰

「惟ふに、我が皇祖諸天皇等の宸極に光臨する者、豈に一身の爲ならんや。蓋し人神を司牧し、天下を經綸する所以なり。故に能く世に玄功を闡き、時に至德を流す。今朕大運を奉承し、黎元を愛育す。如何か當に聿に皇祖の跡に遵ひ、永く無窮の祚を保つべき。それ群卿百僚、爾の忠貞を竭し、共に天下を安んずる、亦可ならずや。」（原漢文、日本書紀）

此の如く上代の規模は宏大であつた。即ち万民を提げて、四海に臨むのにあつた。此の皇猷を紹述することが明治維新の目的であつた。要するに、吾人が前に列記した三大綱は、悉く此の令と詔との中に包含されてゐる。天皇と人民との中間に介在する將軍政治を止めたのも、日本の擧國的統一を妨げる封建制度を廢したのも、其の他門閥の特例を去り、公家・大名・士族の特權を罷め、事實に於て階級制度を除いて万民平等の政を行ふやうになつたのも、一として我が國史の本源に溯つて其の精神に則らぬものはなかつた。これ王政復古の王政維新である所以で、王政維新の王政復古である所以である。明治維新は決して武家政治に代へるのに公家政治を以てするのではなかつた。明治維新は實に大和民族が帝國的に自覺した日本歴史の分水嶺とも云ふべき新時代の開始であつたのである。（國民小訓）

二　大空に日あり

沼波瓊音
名は武夫、名古屋市の人、明治十年生、俳人、第一高等學校教授

大空に日あり
長へに天が下を照らす
日　地にありて
人の姿と現れ給ふ
これを天皇と申し奉る
天地の初の時中
諸〻の神たち諸〻の德を積ませ給ひ
終に日そのまゝの德ある神の出現を見る
天照大御神即ち是なり
是に至りて日大空に在り日また大地に在り
大御神天つ日嗣の榮えまさんこと天地のもたゝと共に窮まりなしと
宣る

沼波瓊音

神代の一切を寓言と言ひ傳へつゝものも
いかでかうの勅を寓言と言ひ得ん
徽として三千年末の事實たり
今に至りて大勅愈〻輝く
世界に於て發せられしくさ〻の緣言の中に
なぐうの一勅のみぞ〻く中りし緣言なり
大御神の德は一貫して列聖の德なり
列聖百に餘り給へども大御心は唯一なり
即ち天照大御神の御心なり
即ち久方の日の御靈なり
民は常に天皇の子なり
即ち日の子日の女なり
淨光明壯嚴の世界

そはかくり世にあらず想の國にあらず
現にこの世のこの日の本にそれなれ
諸の天體系皆その太陽を心として循る
限りなき活動しかも心なる太陽を衛り太陽に守らる
而して太陽は理にあらず物なり光明赫灼なる物なり靈妙不
可思議なる物なり
天道これを措きて他なし
天道は即ち我が國の神道なるなり
衛る所目に見えざる理にあらず現に拜みまつる天皇なり
世界たゞこの國に天道存す
大御寶の日子日女は天皇を衛る數なき皇なり
天照大御神宣く我が兒この鏡を見まさんこと吾を見る如く
すべしと

甚深微妙なる大御神の教
天つ日嗣の御子も御寶も御鏡に向ひてをろがむ
御鏡に映るは我が形なり
而も我が形は即ち列聖の御形大御神の御形なり
幾億萬の人生れ死になる末々もをろがむ時その數を超越し
時を超越したゞ日の神の御靈に帰一す
即ち我が身この一貫の德の一節なることを意識す
この一節の命立ちどころに亡びんも辞せず日の德太陽の精
神天皇の德の光被たゞこれをしも第一義と意識す
光被　全世界への光被
我等はたゞこれがために生くるなり努むるなり
日の本の國の名も日の旗もたゞこの理想を表すがための印
なるなり

大空に日存り
地に天皇おはす
光被の使命まことにこの國に在り

千葉龜雄
千葉龜雄、號は江東、山形縣の人、明治十一年生、大阪毎日新聞社員

三　大衆文藝

大衆文藝とか民衆文藝とかいふ標語が、我が文壇でいつ頃から叫び出されたものか、その紀元ははっきりと解らない。が、大正十二年の關東大震災以後に、とりわけ力強く唱へられるやうになつたことは爭へない。

それにはトルストイ（Tolstoi）やロマン、ローラン（Roman Roland）等が有力な手引を與へ、おぼろげながら大衆や民衆の定義をも敎へてくれたやうに思へるが、さて現實の文藝の前に立つて、もう一度大衆や民衆の區域を定めようとすると、容易にその繩張をつけることは出來ない。理

論が先在するのに拘らず、現實に行惱む所に、現代社會の混亂と複雜性があり、またそこに過渡期の時代性も有力に語られてゐる譯である。

ロマン・ローラン

だから、大衆文藝といふ掛聲は、隨分到る處に高調されてはゐるが、さてその大衆文藝の作者である人々は、餘り明瞭な大衆文藝の定義は與へてくれない。たとひそれらの人が皆それ〴〵一つの定義を持つてゐるにしても、その定義が一つ一つ相違してゐては、どれをも確定した定義と定める譯にはいかない。

いや、大衆文藝は現在のところまだ黎明期にある、いろんな體驗と觀照とを經て後に、始めてその定義が定まるのであるといへば、

それも一つの理窟である。或はまた、大衆が時代を作らずに、時代が大衆を動かすから、時代に即する大衆文藝の定義は容易にこれを作ることが出來ないのであるといへば、それもまた一つの理窟である。

それでも、その中から、何程かの假定した定義を拾ふことが出來ないこともない。第一には、現代までの文藝はブルジョアの文化の上層を裝飾する一つの壁紙である。隨つて文藝の要素をなすものは、皆前代文化の育みを受け、それだけ前代文化を辯護する地位に立つ約束を持つてゐる。ところが、現代はブルジョアの文化と對立して、プロレタリヤの文化の陣營があり、そして、大衆はプロレタリヤに與するから、そこにプロレタリヤの生命を目標とする所の大衆文藝が新に生れなければならないといふのがその一つである。

第二には、前代は文化が爛熟しすぎるほどに教化された社會であつたが、來るべき時代は、生活の姿から見ても十分にさうした教化を受け得られない斷層である。ところが、爛熟した前代文化は、藝術を人生のために創造しないで、藝術のための藝術を創造することが藝術であるとしてゐた。そして、藝術家といふ特殊な藝人がこに誕生して、自分達の奇矯な道樂だけに法悦してゐた。しかし、それだけの教化層に生れなかつた來るべき時代人に取つては、その藝術は、何等己の心に觸れる所のない、意味の不明な文字の臚列でなければならない。大衆文藝は大衆の教化に並行し、大衆の理解する埒内に於ける文藝を與へようとするものであるといふのがその一

千葉龜雄

つである。

第三には、藝術が單なる藝術家の遊戯であり道樂であつたために、それは出來るだけ人生の現實と隔離して、觀念や想像の上での別な世界を作ることを念とした。　が、大衆の求めるものは、何よりも人生であり現實である、人生と現實の底に潜む徹底した意義である。　で、大衆文藝とは人生を藝術の中に融合させることではなくて、藝術の中に人生の意義を象徴するものでなければならないといふのがその一つである。

此等の說は何れも必然性を帶びた要求である。　そして、文壇の現實に於て、この要求が何程かづつ形の上で滿たされてゐるやうに見える。　例へば、近頃の批評界に於ては、內在以上の批評といふやうに、藝術を從來の藝術概念だけで批評せずに、それを全體社會の諸機關に照らし、それと並行して批評せよといふやうな要求が

それである。　次には心境小說や私小說が一千葉龜雄　龜雄

だん〳〵姿を隱して行つて、もつと客觀的な、若しくは全人生的な見方に移動して行く傾向が注意されて來たこともそれである。　そして、今後の通俗小說はかうした潮流を取るから、大衆文藝に於ては通俗小說が可なり大きな主潮となるだらう。

千葉龜雄自署

が、この見方は半分を否定して、半分を認定すべきである。　それは、同時に第二の見方を否定するからである。　つまり、大衆はその教養が淺いから、いつまでも彼等に理解される程度の所謂通俗小說を與へさへすればよいといふ見方は宜しくない。　淺い教養を次第に引上げて、眞の深い藝術境に到達させることを理想としてだけ、始めて現代の雜駁な通俗小說や大衆文藝の存在も許される

ことが出來るのである。だから、現代の大衆文藝家はいつまでも現狀に停滯することを許されない。たゞ現代の大衆文藝や通俗小說が、所謂藝術小說に比べて、生きた現實、生きた社會と生活とに、より廣く接觸して來たことは、確に爭ふことの出來ない事實である。この一點だけでは、自分は所謂通俗小說と大衆文藝の或行き方を禮讚する。たゞその深さ如何が問題となるし、そこに藝術との分離がある。

が、社會には大衆の外に何があるか、眞の藝術の外に何があるか。然るに、そこに大衆文藝・通俗文藝が藝術小說に對立しなければならないことは、過渡の時代を象徵するものでなくて果して何であらう。

四　人生の熱愛者

安倍能成

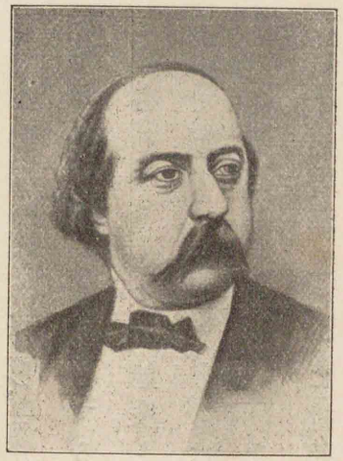
安倍能成
松山市の人、明治十六年生、哲學者、京城帝國大學教授

フローベール
佛國の小說家
(1821—1880)
自然主義の主導者

フローベール Flaubert は、「藝術家は藝術の爲には人生をも犧牲にして了はねばならぬ。」と云ふ意味の事を言つたさうである。此は飽くまでも人生の冷酷な觀察者であらうとした彼の、痛ましい程の覺悟を表した詞と思はれる。彼の一生がどう云ふ一生であつたか委しくは知らないが、併し、自分が今此處で感じた事は、此の人生の冷かな傍觀者であらうとする態度は、飽くまでも人生を經驗し、味讀し、體得しようとする態度とどうしても衝突せずにはゐないと云ふ事である。其の上、自分は人生の傍觀者としての所謂冷酷な觀察の價値に就いても疑問を持つて居る。

實生活の渦卷の中に捲込まれないやうにして、而も其の一波一瀾の起伏をも見遁すまいと冷酷に見張られた眼には、人生は其の千態万樣をさながらに映ずるであらうと思はれる。けれども、一擧手・一投足にも藝術家的觀察の心掛を弛めない人が、果して眞に

能く人生の情趣に味到する事が出來るであらうか。固よりフローベールのやうな天才の觀察は、其の官能の鋭敏、其の頭腦の明快、其の非凡な能力に依つて、普通の人間が前後を辨へず夢中になつて感激したり、懊惱したり、歡喜したりする心理の内奥の微妙にまでも想到する事が出來るであらう。併し、自分には、一方に於て觀察者であらうとする努力が、眞劍な生活の障礙にならないとはどうしても思はれない。隨つて此の點から見て、縱令如何ばかり精到を極めた觀察でも、尙一膜を隔てて内奥の消息に徹し得ない缺點は免れ得ないと思ふ。自分はどうしても純藝術家的態度に滿足しない。又藝術家に人間としての豐富な眞劍な經驗がなければ、其の藝術は



フローベール

どうしても一味の偉大さ深遠さを缺かざるを得ないと思ふ。無論フローベールに人生の經驗がないと言ふのではない。自分はこんな事に立入つて彼此言へるほど彼を知つて居る者ではない。此處では大體から見て其の態度に就いて言ふだけである。

自分は思ふ。藝術家である事は必須な事ではない。先づ人である事を要する。藝術家は人生の描寫者である前に、先づ人生の體驗者であらねばならない。「山に入る者は山を見ず。」とは言ふけれども、居ながらに遠望する者は、山に入る者よりも山を知らない者である。縱令山の姿は知つても、山の眞實を知らない者である。人生を觀察する所の眼は藝術家に取つて固より缺く事が出來ない。併し、偏に藝術家的態度に急ならんとする弊害は、どうしても其の人をして人生の皮相を觀察して人生を知り得たとなし、人生の外部的現象を追ふ事が徒に細かにになつて、其の内部的意味を逸

するやうな弊に陷らせ易いと思ふ。

客觀的に靜觀するのは宜い。併し、先づ主觀的な豐富な經驗を持つて欲しい。坂を登り、谿を渉り、巔を極めて、又野に下つて山を見る人は、眞に山を知る人であると思ふ。若し零細な經驗を種にして、すぐ手輕に、冷酷な觀察者に成りすました氣で居る人があるなら、自分は其の心事の淺薄を陋とするに躊躇しない。

安倍能成自署

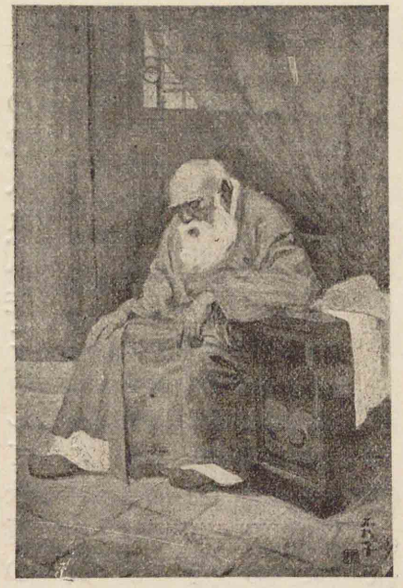
如何にして人生を知るべきか。自分は此處に至つて、「愛するは解するなり。」と云ふ陳い詞の新しい意味を發揮して來る事を認めずには居られない。人生を熱愛する人でなければ、人生の深い大きな意味にまで潛り入る事は出來ない。愛する者だけ深入する事が出來る。自分達は人生の熱愛者に依つて與へられた藝術を渴望する。それが或は憎惡・痛罵・呪詛の聲に依つて現れて來ても、

或は又一波涙の起伏もない冷靜な姿で出て來ても、其の底に何處とも知れない此の熱愛の潮の遠鳴りのどよめいて居る藝術が欲しい。

今の或人は、人生に對して永遠の懷疑に居るなどと口先では言ふけれども、其の實は餘りに早く人生を見極め過ぎたのではあるまいか。彼等は人生の現實の相を憚らず見得たと云ふ大膽に自負して、更に人生の探究に進む事を止めた。彼等は空想の排斥せねばならない事を呼號して、彼等の所謂現實の經驗と云ふものに行詰つた。彼等の苦笑には悲痛よりも寧ろ得意がある。要するに、彼等の人生に對する愛は極めて淺かつた。

人生を愛する人の藝術は、即ちヒュマニティー（Humanity）の藝術であらう。併し、自分はヒュマニティーの藝術と云ふ事を、唯單に義理人情の藝術と云ふ意味にだけは解釋したくない。一般に云ふ義理人情

と云ふ詞だけでは、内容の大きさや深さが足りない。忠義と云ひ、孝行と云ひ、貞節と云ふ類の、唯社會的・家族的の道徳よりも、又人道と云ひ博愛と云ふ、所謂世界的道徳よりも、内部的生命の愛重と云ふ事は、ヒュマニティーの根本義であらうと思ふ。個性の泉を深く自由に掘つた消息を傳へる藝術こそは、力に乏しい者に力を與へ、萎靡した内部的生活を振興させるものである。



老子（中村不折筆）

自分は嘗て老子の「大道廢れて仁義あり。」と云ふ詞を讀んで、何となしに涙を催した事があつた。そして、何處やらにヒュマニティーの聲を聞くやうに感じた。偉大な作家の作品からは自分は常

に人生に對する愛の響を聽取し得るやうに思ふ。

現今の作品は一體に皆上手になつたけれども、併し、出て來るものも、出て來るものも、大方一様になつて來た。此は自然の狀態でもあらうから、徒に「天才出でよ。」と呼號しても、何の効果もあるまい。けれども、若し此の時に新たな泉に掬する人があるなら、それは人生を愛する人であらう、人生の辿りを深くする事を止めない人であらう。こんな人だけが獨り新しい天地を拓く事が出來る。それは内から我等を動かす事の出來る人である。藝術上の新局面は唯描寫の態度に依つて開拓され得るものではない。人生に對する根本的態度から導いて來られねばならない。若しそれ人生を愛すると云ふ事が、徒らな人生の謳歌と云ふ意味でない事の如きは、今更絮説する必要もあるまい。

最後に附言する。自分は以上主として藝術家の態度に就いて

語つて來たが、此の根本精神は啻に藝術家だけに限らず、宗教家・科學者・政治家・教育家・實業家、其の他あらゆる人、農夫にでも職工にでも共通するものであると信ずる。

畢竟するに、自分は冷靜な傍觀的態度に偏する事を極力排斥する。そして、眞に人生を熱愛し、其の渦中に投じて悲喜・歡樂・痛苦を具さに味ひ、生命のある限り理想に向つて勇往邁進せねばならないと信ずる。（思想と文化）

五　愛國の本義

尾崎行雄

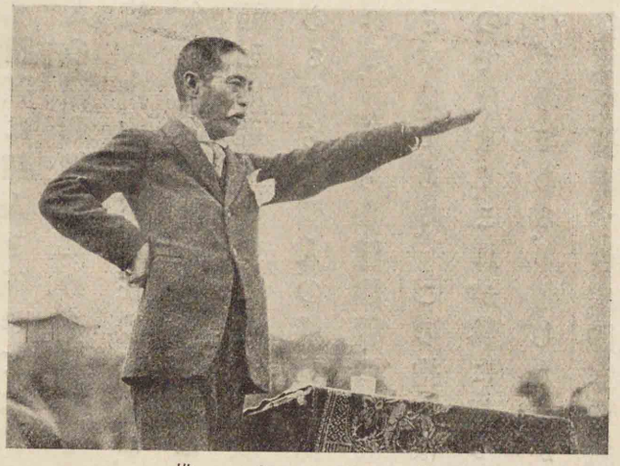
尾崎行雄、號は學堂、三重縣の人、安政六年生、政治家、衆議院議員

人は誰でも自國を愛する。愛國心は決して、或國民に限つて存在する專賣特許的の觀念ではない。然るに、日本國民は世界第一の愛國者を以て自ら任じて居る。私はこの自尊心を重んずる點に於ては敢て人後に落ちないが、只その內容・實質に就いて日常憂慮に堪へない節がある。次にその一二を記さう。

國家は個人を離れては存在し得ないが、併し、國家は決して一個人の福利增進だけを目的として發生したものではない。國家の使命・目的及び存在の理由は、その地域內に住居する個人々々の生命・財產の安全を保證するばかりでなく、進んで最大多數の最大幸福を增進するのに在る。故に最大多數の最大幸福の爲に必要であるならば、個人の權利・自由もその必要な最少限度に於て拘束される。即ち各種納稅の義務、徵兵の義務、及び國法に從ふの義務などが是である。この拘束は決して之に服從する者の幸福を奪ふのではなく、これが爲に却つて一層大なる自由と幸福とが保證されるのである。若し人々が之に服從することを嫌つて、絕對の無拘束を要求すれば、國家の統制は成立たない。人々は各、生命・財產その他の權利を保證する最高の機關を失ひ、結局僅少の自由を守

る爲に最大の自由を失ふことになる。それ故、國家組織の中に在る人民は悉く皆有機的に結合された一個の生活體といふべきである。

「自分さへよければ他人はどうなつても構はない。否、他人の權利・自由を蹂躙し侵害しなければ、自分の成長・發展が遂げられない。」といふやうな考へ方は、眞に自己を愛する所以でなく、却つて自分を殺し他を害する危險思想である。愛國心の場合もほゞ之と同樣で、「自國の爲にさへなれば他國はどうなつても構はない。否、他國の獨立又は利益を侵害しても、自國の國利・國權を增進



尾崎行雄

するのが愛國心の本義である。」といふやうな思想は、決して國家を久遠に繁榮させる眞の愛國心ではなく、却つて國家を危地に陷れる危險思想である。

人體內部の主要機關である五臟六腑の病患は言ふに及ばず、たとひ指頭に刺さつた小さな刺の痛みでさへ、それは決して局部の苦痛だけに止まらず、全身が皆その影響を受ける。斯くの如く今日の國家內に於ける人と人、地方と地方との關係は之と同じである。勞働者がなければ資本家が立たず、農村が疲弊すれば都市も亦衰微する。この有機的關係は一國家內の現象に止まらず、交通が開け文化が進むに從つて、世界列國は遂に一つの有機的關係に到達すべき運命を有して居る。現在の國際關係はまだ一國家のやうに高等生物的の有機的組織には到達してゐないが、ともかく動物程度の有機的關係にあることは既に明白に看取し得られる。

世界大戰以前の國際關係はまだ植物程度の不完成な有機的關係にあつた。それ故、右の枝を切れば左の枝が榮えるやうなこともあり得たが、既に動物程度にまで進んだ今日の國際關係に於ては、右手を切つて左手が太り、甲國が亡んで乙國が榮える譯には行かなくなつた。現に戰爭に勝つた聯合諸國は、敗けたドイツ〔獨逸〕Deutschをいぢめることによつて各〻自國の繁榮を期することの出來ない所以を悟り、今や却つてその復活の爲に援助を與へねばならないやうな、從來の戰爭には見ることの出來なかつた不思議な現象を呈して居る。これ畢竟今日の國際關係が既に植物的有機體の程度を通過して、動物程度の有機的關係に進んだことの一證左である。

今日以後、國家の久遠の隆盛と、不退轉の繁榮とを希ふ眞面目な愛國者は、この嚴肅な大戰の教訓に深く省みる所がなければならない。茲に省みる所があれば、恐らく何人でも、大戰前の世界に流

行した侵略主義的愛國心は今後の國家を眞に隆昌に導く所以でないことを悟るであらう。今後の國家繁榮策は從來よりも一層國際協調の精神によつて導かれねばならないことに氣付くであらう。

外、大いに國權を伸張し、內、大いに人民の福利を增進することは、勿論國家構成の使命であり目的である。そして、之を遂げる道は二つある。その一つは覇道的軍國主義で、他の一つは王道的平和主義である。前者は盛に軍備を擴張し、弱小國を蹂躙して、自國の勢力を伸張する痛快な行き方で、後者は敢て他を侵さず、正義に據り、人道を踏んで、自然に國の威信を高め、よつて以て國運・民命の伸展を期する地味な流儀である。隨つて前者の外觀の如何にも華華しく勇しいのに較べて、後者は餘りに色彩がなく、動もすれば意氣地なしのやうにも見える。それ故、躍進的國民の人氣は常に前

者に集るけれども、歴史の教へる所によれば、眞に國家の隆興・長生をいたすものは、前者ではなくて後者である。覇道は權道である。時と場合によつては一時權道を執る必要もあらうが、眞の愛國者は常に一日も早く王道に復歸しようとする心掛を持たねばならない。

世界大戰前の世界列强は概して軍國主義を奉じてゐた。就中〔露西亞〕ロシヤ Russia とドイツはその代表的國家であつたが、この兩雄は今果して如何の狀にあるか。彼等は覇道的國家の眞に果敢ないものであることを語る墓標である。〔英吉利〕イギリス English はやはり覇道を以て國を建てたが、之を守るのに、――まだ理想的でないが、――王道を以てした。これその生命の比較的長い所以である。

文明が進み、國際の交渉が頻繁になり、世界が一つの有機的組織に進んで來れば、自國の發展の爲なら他國を蹂躙してもよいといふやうな我儘勝手が許される筈はない。各國が皆我儘勝手を働いて互に相讓らなければ、茲に大衝突を惹起するのは必至の勢である。あの世界大戰はこの帝國主義の當然達すべき歸結であつた。そして、この大戰の慘憺たる試練は、各交戰國民に軍國主義の破綻を痛切に教へた。從前でも、戰爭をすれば、多數の人命を損じ、莫大な財産を煙にすることは分つてゐたが、幸に勝ちさへすれば生命と財産の夥しい損失を取返して餘りがあるほどの精神的及び物質的の代償が得られた。國民の福利は勝利の度毎に著しく增進するかのやうな外觀を呈してゐた。所が、あの大戰はこの幻影を木葉微塵に吹飛ばし去つた。負けた側の悲慘さはいふに及ばず、勝つた側でも勝利の快感に醉ふのには餘りに手傷が重かつた。今後の戰爭は敗けたら亡國、勝つても國利民福が增進せず、その創痍を恢復するのには、戰敗國と同樣な苦痛を嘗めねばならな

いことを、各國ともしみ〴〵と體驗した。この體驗の結果、軍國主義ではいけない、なるべく戰爭を避ける手段を講じ、各國が協調して行くより外には、眞に國家を隆盛にし、國民の福利を增進する手段のないことを悟つた。

そこで、戰前に於て世界列强の風潮であつた軍國主義・侵略主義の國策は一變して、國際主義・平和主義の理想が擡頭するやうになつた。我等はこの變化に順應し、進んでこれを指導する意氣込を以て、日本を王道的平和主義の國家にせねばならない。（政治讀本）

鳩山秀夫　岡山縣の人、明治十七年生、法學博士

穗積先生　名は陳重、愛媛縣の人、法學博士、男爵、樞密院議長、大正十五年歿、年七十二

自修文

六　穗積先生の業績

鳩山秀夫

穗積老先生の日本法學の進步に對する功績は、二つの方面から考へられる。一つは法典編纂に於ける業績であり、他の一つは法

ボアソナード　佛國の法律學者、明治六年來朝し、我が國の法律界に功勞が多かつた（1825―1910）

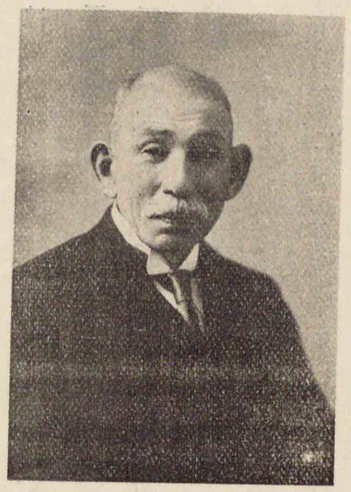
急先鋒　眞先に立つ人

富井政章　京都府の人、安政五年生、法學博士、樞密顧問官

梅謙次郎　松江市の人、法學博士、明治四十三年歿、年五十一

律學そのものに對する學的寄與である。法典編纂の方面では、先づ何よりも先生が日本民法の編纂に多大の力を致されたことを擧げねばなるまい。我が國では、明治二十年に、佛人ボアソナード（Boissonade）に命じて民法草案を起草させたのであるが、その出來上つたものは佛國民法の模寫に過ぎないものであつた。それゆゑ、明治二十五年の五月及び六月に、第三帝國議會に際し、院の內外に、民法典施行延期論が起つて、斷行論と爭つたが、遂にこれを制して民法商法施行延期法案は兩院を通過した。先生はこの時延期論の急先鋒（せんぽう）であつて、その後出來た法典調査會に於て、富井政章・梅謙次郎兩先生と共に起草委員として、今日見るが如き民法の草案を作られた。我が國の民法が、外國のそれの模倣に陷らず、完全とは言はれないまでも、ドイツ（佛蘭西）・フランス（France）・スウィス（瑞西）（Swiss）などの民法を參照し、日本固有の舊慣を考慮して、今日の民法が施行されるやうになつたのは、これ

を先生の最も大なる功績に歸せねばならない。その他、先生は法制審議會に總裁として諸法典の編纂に、就中信託法・陪審法などの制定に力を盡されたことも忘れてはならない。



穂積陳重

法學への學的貢献の方面では、法學の研究範圍を廣くされた功績がある。明治初年の帝國大學の法律學は主として英米法によつてゐた。先生は、英國に留學されたが、歸途にはベルリン（伯林）大學に（Berlin）も學ばれ、法律を修めて歸朝された。歸朝後は勿論英米法も講ぜられたが、それ以外の外國法をも研究教授されて、偏狹（へんけう）に陷る弊を救はれた。また先生の研究方法が、沿革的であり、比較法的であり、また法理學的であつたことも特筆すべきである。それは先生の

畢生（ひつ）の一生

三浦周行　島根縣の人、明治四年生、京都帝國大學教授

中田薫　秋田縣の人、明治十年生、法學博士、東京帝國大學教授

著書「隱居論」・「五人組制度論」・「祖先崇拜と日本法律」や、その畢生（ひつ）の大著とされてゐる「法律進化論」に於てもこれを窺ふことが出來る。

先生の研究方法の中で最も顯著なものは、法律を進化するものとして觀察する法理學的の見方である。この點では、三浦周行博士・中田薫博士等の純歷史派の人々からは、往々史實に違反する事例を引用してゐるといふので反駁（はんぱく）されたこともあつたが、これは法學研究の方法の差異から來たものであつて、これがために法理學者としての先生の價値には毫も影響を及ぼさないことはいふまでもない。

先生の著書「祖先崇拜と日本法律」は、英語には勿論のこと伊・獨の二國語にも飜譯されて、海外に於ける法學研究にも非常に貢献してゐる。先生が終生の大業とされてゐた「法律進化論」は、僅に第一部原形論の上卷第一・第二の兩册が出ただけで、未完成に終つたの

古稀
七十歳

は學界にとつて最大の遺憾事である。「法律進化論」の先生自序の文には、「今や齡既に古稀に達し、老耄將に至らんとするに及んで、全部六卷の計畫中、僅に第一部の上卷二册のみを公刊し得たるが如き遲緩なる功程なれば、生前に於ては計畫の半ばをも成すこと不可能ならんと想はれて、今更過去の怠慢を恥ぢ、また立法事業等のために純學業に力を專らにすること能はざりしを悔い、徒に日暮れて途遠しの嘆をなすのみなり。」といはれてゐる。その篤學な一面を仰慕するに餘りがあるであらう。

鳩山秀夫

先生が帝國大學の教授であつた頃、毎週法理學の演習會を開き、また私財を擲つて法理研究會を起され、現にこの研究會は毎月一回講演研究會を開いてゐるが、それも先生を偲ぶ一つの記念となつた。今日の法律學が昔の模倣時代を脱して組織的になつたことに關しては、何といつても先生の功績は著しい。私などは今でも、法の概念や權利の概念については、先生の講述された昔のノートを引出して見ることが度々ある。

七　近代の和歌

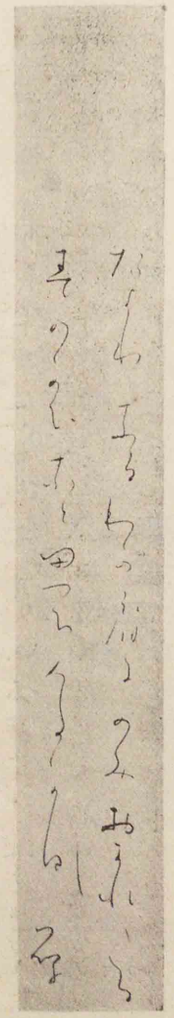
○

山寺の一重の櫻ちるに似て、
さびし夜明の星消ゆる空。

與謝野晶子

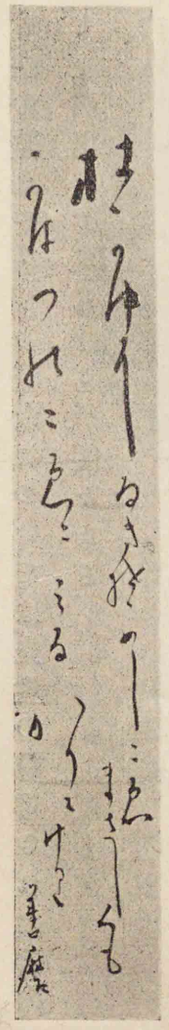
與謝野晶子
與謝野寛の妻、堺市の人、明治十一年生、歌人

たよわなるわが肩にのみおかれたる春のかひなと思ひけるかな　晶子


晶子筆蹟

土岐哀果
名は善麿、東京市の人、明治十八年生、歌人、東京朝日新聞社員

杜かげになきそめしこゑまさしくもかはづのこゑにみなりけり　善麿


哀果筆蹟

箪笥より去年のかたびらとりいづる
　手ざはりなどは何にたとへん。
劫初より作りいとなむ殿堂に、
　われも黄金の釘ひとつ打つ。

土岐哀果

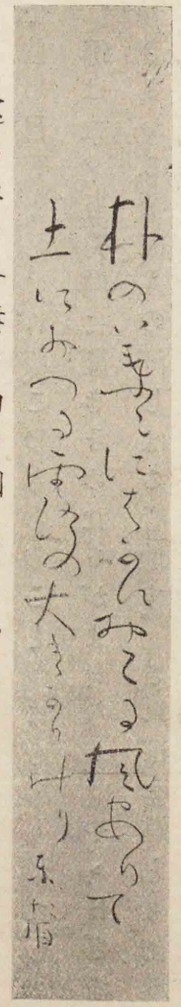
○

つとめより夜霧の街をかへる時、
　心しめやかに母をおもへり。

停車場より家路を辿る四五町の
　冬の月夜のなつかしきかな。
貧しくも人は生きゆくこの町の

橋田東聲
名は吾一、高知縣の人、明治一九年生、歌人

朴の葉にはかにおこる風ありて土におつる露の大きかりけり　東聲


東聲筆蹟

みな戸をとざし音もなし雪。

橋田東聲

○

春の日のひねもす照ればおのづから
　いのちめぐりて草土を出づ。

窓のべの若葉の雨の明るくて、
　書きし手紙はよく書けにけり。
水汲みてもどる月夜の坂道に、
　弟とおもき桶かへにけり。
かくしつゝ我がありへると天遠き
　父母のみたまに事告げまをさん。

八　百虫譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきもののかぎりなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ荘周が夢もこのものには託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸ひなれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺ましければ、このもののこと更にも誘りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙とも いふことを聞かぬに、このものばかり初蟬といはるゝこそおほきなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたゞふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びか

横井也有
名は時般、尾張藩士、江戸時代後期の俳文家、天明三年（一七八三）歿、年八十二

荘周が夢
昔者荘周夢ニ爲ニ胡蝶一、栩栩然胡蝶也、俄然覺、則蘧蘧然周也（荘子）

古今の序に
花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける

翁の云々
古池や蛙とびこむ水の音（松尾芭蕉）
翁は芭蕉の尊稱
やがて死ぬ
末句は「蟬の聲」

貧の學者
晉の車胤

ひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのもののためにやとまでぞ覺ゆる。しかるに、貧の學者に取られて油火のかはりにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

横井也有

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃鳴くなり。つく〳〵ぼうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。「筑紫の人の旅に死にてこのものになりたり。」と、世の諺にいへりけり。おはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。もろ

退隱の媒

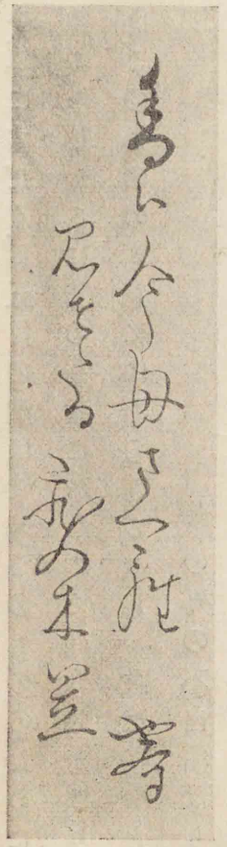
楚國襲舍、初メテ隨ニ楚王ニ朝、宿ニ未央宮ニ、見ル蜘蛛大如キヲ栗、四面ニ縈ニ羅網ヲ、有レ虫觸レ之而死、舍乃歎曰、吾モ生亦如レ此耳、仕宦者人之羅網也、豈可ニ淹歲ヲ於是挂レ冠而退、時人謂レ之爲ニ蜘蛛之隱ト(金樓子)

賴光源滿仲の子

香は今もさくら見せたるひの木笠　也有

こしの昔には退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵の初として賴光をさへ脅かしたる、いとおそろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふ折もあらんか。彼はかひ〴〵しく巢つくりてこそあれ、東海道に散りぼひたる宿なし者をばくもとはいかでいふやらん。

芋虫は腹立つるものにたとへ、毛虫はむづかしき親仁の號とす。背虫、吝虫は名のみにして、虫ならず。油虫といふは、虫にありて憎まれず、人にありて嫌はる。



横井也有筆蹟

蠶の生涯は世のために終り、火取虫はたがた

槐安の都

淳于棼ノ夢ニ入リ大槐安國ニ見レ王、王曰、吾南柯郡、屈レ卿爲レ守、居凡廿載、使者送出レ穴、遂ニ寤、尋ニ古槐下蟻穴、洞然明朗、乃槐安國、又一穴直上ニ南枝一、即南柯郡也(異聞集)

千丈の堤

千丈之堤、以レ蟻蟻之穴潰(韓非子)

歐陽氏

名は修、支那宋代の文豪(一〇七一―一〇八四)「憎ニ蒼蠅一賦」がある

めに身を焦すか。

蜉蝣はかなきためしに引かれ、蓼くふ虫は不物ずきの謗となれり。

おなじ寶の名に呼ばれて、玉虫はやさしく、こがね虫はいやし。

蟻は明暮にいそがしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安きことを得ん。さるものたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子に憐まる。

狗の齒に嚙まるゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手に探らるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちたれども、行くさき〳〵を負歩くは、雲水の安きにも似ず。

蛇・蚯・蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさ虫の數多きは不用の

長嘯子　木下勝俊、豐臣秀吉の臣、慶安三年（一六五〇）歿、年八十一。「憐こ紙魚ニ詞」がある。原・吉原ともに駿河國

ことなり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠に乗りて富士を眺め行く人には似たり。

促織・鈴虫・轡虫はその音の似たるを以て名に呼べり。松虫のその木にも寄らぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき虫にもおなじ名ありて、松を枯らし人にうとまる。ひとつ在處にふたりの八兵衛ありて、ひとりは後生を願ひ、ひとりは殺生を事とす。これ松虫のたぐひなるべし。

蟋蟀のつゞりさせとは、人のために夜寒を教ふるなり。藻に住む虫はわれからとたゞ身の上を歎くらんを、蓑虫のちゝよと呼ぶはいと優しげなり。されど、父のみ戀ひて、などかは母を慕はざる

われから　あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそなかめ世をば怨みじ（藤原直子、古今集）

七賢　嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎

らん。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすがに卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたるまたは、長月の頃力なく殘りたる寂しきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり燒く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の藪の中で夜ばなしには、いかに團扇の隙なかりけん。（鶉衣）

九　新島守

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打ちわたしがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都に近づくよしきこゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六万餘騎とかや。宇治・瀬田へわかちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も

六月　承久三年（一二二一）

泰時　北條義時の子

時房　北條義時の弟

本院　後鳥羽上皇

及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあらんと君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども頼もしげなし。

後鳥羽天皇（藤原信實筆）

六月二十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に味方の軍敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐國におは

鳥羽殿　山城國鳥羽にあつた、いはゆる城南の離宮である

ものにもがなや

とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はん（源氏物語引歌）

ねのひするのべに小松のかりそめにかりせばちよのためしになにをひかまし　忠見

信實　右京權大夫藤原信實

七條院　御名は殖子、後鳥羽天皇の御生母

新院　順德上皇

帝　仲恭天皇

しますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましう哀れなり。「もるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおのにもがなや。」とおぼさろす。御年四十に一つ二つやあまらせ給ふらん。まだいとをしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて、同じ十三日に、御船に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはしまされず。いかなりける世々の報にかと恨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや、七月九日、帝をもおろし奉りき。この卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて

後鳥羽天皇宸筆

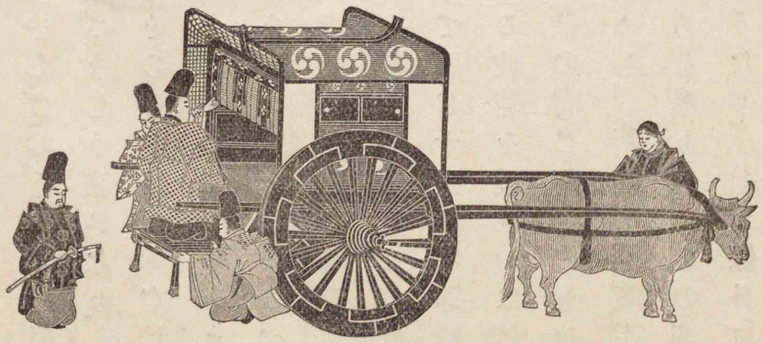
中院土御門上皇

若宮邦仁親王、後の後嵯峨天皇

おり給へるためしもこれや初なるらん。

さて、上達部・殿上人、それより下はた殘りなく、この事に觸れにしたぐひは、重く輕く罪に當るさまいみじげなり。

中院は初より知ろしめさぬことなれば、東にもとがめ申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらんことといと恐あり。」とおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。　去年の二月ばかりにや、若宮いでき給へり。　承明門院の御兄人に、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。　やが



綱代車

源通親
- 通宗
- 通子（後鳥羽帝生母）
- 通方
- 承明門院在子（土御門帝生母）

六つにて後鳥羽院

てかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。　道すがら雪かきくらし、風吹荒れ、吹雪して、來しかた行先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかゝれ
とてこそ生れけめ、
ことわり知らぬ
わがなみだかな。

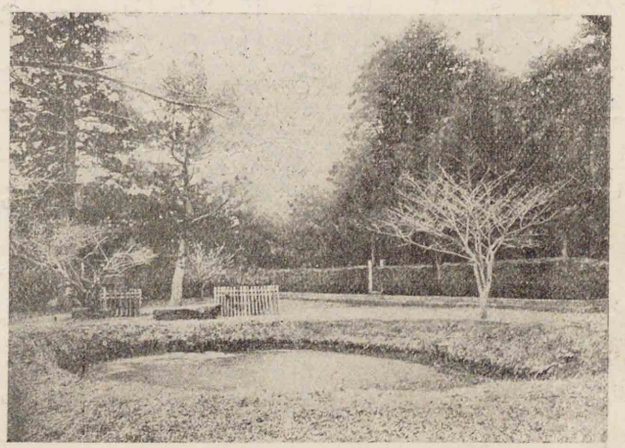
眞野陵（順德天皇御火葬塚）

「せめて近き程に。」と東より奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

六つにて位に即き給ひて、十三年おはし

ましき。下り給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じことなりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして、万機の政を御心一つにをさめ、百のつかさを從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有樣にて、遠きを憐み近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もやう〳〵枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空行く月日の

津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葦へ和泉式部、後拾遺集



後鳥羽天皇行在所の遺跡

限り知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのが散り〴〵にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからことふものとては、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかりながめすごさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいていつを果とか廻り逢ふべき限りだになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡し給ふべき御有樣ども、くちをしといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ里とほき島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に「柴の庵のたゞしばし。」と、かりそめに見えたる御宿りな

柴の庵のいづくにもすまれずばたゞすまであらんしなる世にしばし（西行法師、新古今集）

水無瀬殿　本院の造らせられた殿、攝津國三島郡にあつた

二千里の外　三五夜中新月色、二千里外故人心（白樂天、和漢朗詠集）

れど、さるかたになまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるゝと見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹來るを聞しめして、

われこそは新島守よ隱岐の海の
あらき波風こゝろして吹け。（增鏡）

一〇　大原御幸

法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思召されけれども、如月・彌生の程は嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、後德大寺・花山院・

法皇　後白河法皇　文治　後鳥羽天皇の年號（一八四―一八五）

建禮門院　御名は德子、平清盛の女、安德天皇の御生母

大原　山城國、京都の北

後德大寺左大臣藤原實定

花山院大納言藤原兼雅

土御門權中納言源通親

土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

遠山にかゝる白雲は散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日あまりのことなれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ慣れたる方もなく、人跡絶えたる程も思召し知られてあはれなり。

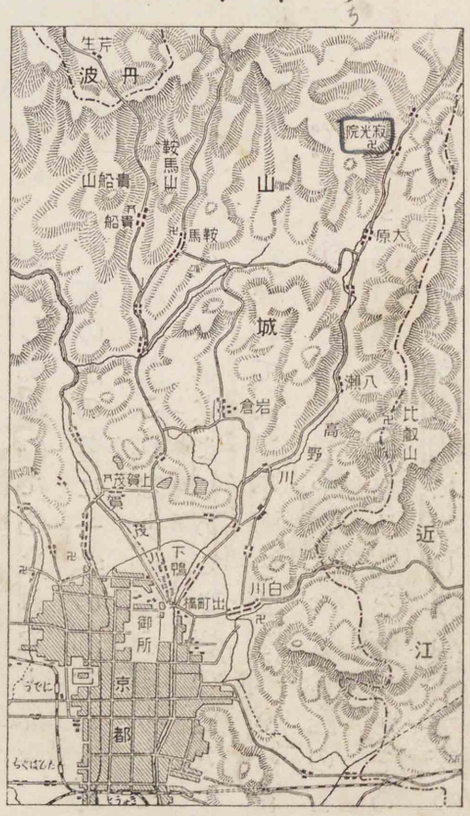
後白河法皇

西の山の麓に一宇の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立、よしあるさまの處なり。

「甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波のうら紫に咲ける色、青葉交り

の遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待顔なり。法皇これを叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

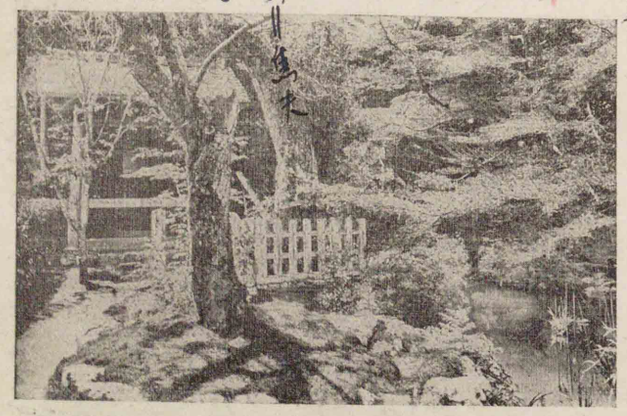
池水にみぎはの櫻ちりしきて、
舊りにける巖の絶間より落ちくる水の音さへゆゑよしある處なり。
綠羅の垣翠黛の山繪にかくとも筆も及びがたし。さて女



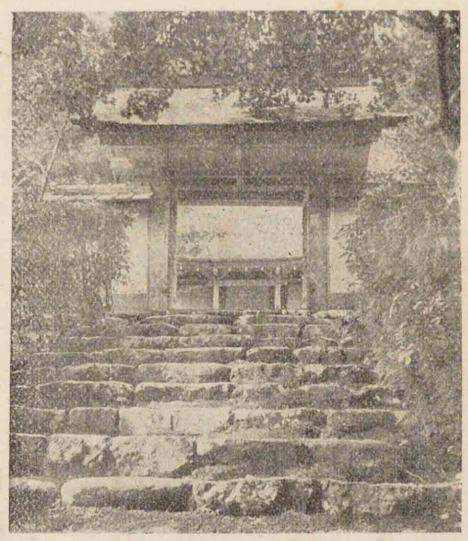
瓢簞云々　和漢朗詠集の句

顏淵・原憲　ともに孔子の門人

院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、「瓢簞」屢空し、草、顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。杉の葺きめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世にたゝぬ身の習として、憂き節しげき竹柱、都の方のおとづれは、間遠に結へるませ垣や、僅に言とふものとては、峯に木傳ふ猿の聲賤が爪木の斧の音、これらがおとづれならでは、まさきのかづら、青つゞらくる人稀なる處なり。



寂光院汀の櫻



寂光院山門

御習といひながら、さやうのことに仕へたてまつるべき人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。」とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬも

法皇「人やある、人やある。」と召されければ、御いらへ申すものもなし。やゝありて、老衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふのを結びあつめてぞ着たりける。あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよと思召して、「そも〳〵汝は如何なるものぞ。」と仰せければ、この尼さめ〳〵と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。やゝありて、涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西の女、阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せんかたなうこそ候へ。」とて、袖を顏に押當てて忍びあへぬさま目も當てられず。

信西
藤原通憲

紀伊二位
信西の妻朝子

大原

（竹内院光嶽）　袈裟御原大

法皇、げにこそ汝は阿波内侍にてあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけてもたゞ夢とのみこそ思召せ。とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたればこと、わりにて申しけりとぞ、おのおの感じ合はれける。

建禮門院御木像

さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の糸を懸けられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚並に先帝の御影を懸けられたり。蘭麝の匂に引きかへて香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土のたへなるたぐひ、數をつくしし綾羅・錦繡の粧、さながら

善導和尚
唐の名僧
先帝
安德天皇

夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見たてまつりしことども今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝありて、上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇「あれは如何なるものぞ。」と仰せければ、老尼涙をおさへて「花筐臂に懸け、岩躑躅取具して持たせ給ひて候は、女院に渡らせ給ひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の乳母、大納言典侍局」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は「世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有樣を見えまゐらせんずらん恥かしさよ。消え(も)失せばやゝ。」と思召せども、かひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もし

一部を複製したのである。

この大原御幸繪卷は寂光院の所藏に係るもの

寂光院は天台宗の尼寺で、山城國愛宕郡大原村草生小鹽山の麓にある。本尊地藏尊の像は聖德太子の作といふ。壽永の亂後、建禮門院は東山長樂寺で落髮して、一時吉田山新長谷寺に隱れ給うたが、後この寺に入つて崩御なされた。よつて寺の後の山に葬り奉つた。寺に門院並に侍女阿波內侍の像を安置してある。門院の像はその御在世の時に手づから作らせられたものであるといふ。

げくして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも返らせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましくたるところに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。（平家物語）

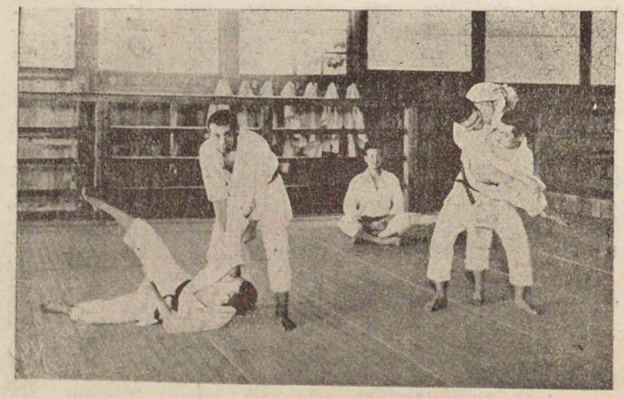
自修文

一一　競技の體驗

一　柔道

二時間ばかり練習すると、マネーヂャー（Manager）から、一同に、「これから試合をやります。」と聲がかゝつた。今日は試合はないかと思つて、練習に精力を盡してゐたので、聊か面喰らつたが、仕方がない。抽籤（ちうせん）の結果、僕が紅軍の先鋒だ。耳に卷いてゐた繃帶を卷直しながら、烈しい心臟の鼓動を靜めて、時の到るのを待つた。頓てマネーヂャーは紅白兩軍の中央の一方に坐つた。側には拍子木、前には時計が用意してある。間もなく先生が「始めます。」と戰を宣せられた。マネーヂャーは白軍の方へ向いて「浦岡君。」と呼び、次にこちら紅軍の方へ向いて僕の名を呼んだ。僕はまだ鼓動が十分靜まつてゐなかつた。併し、負けはしないだらうと思つた。

雙方から禮を交して立上つた。敵は五尺六寸の大男、僕は三寸足らずの小男、立業では損だと思つて、敵を引張込んで寢た。相手は僕の兩足の間に體を入れて、攻撃の狀態に出た。相手が僕の一年下級生だから、僕の味方の者まで敵と一緒になつて、浦岡君に、「さあ足を外して、……手を引いて、……よし、よし、しつかり！



柔道

頑張れ。」などと、異口同音に聲援する。いはば自分は孤軍奮鬪の狀態である。外から餘り敵に應援するので、僕は敵愾心が起つて、「何を小癪な！」と思はず叫んで、力を入れて上の敵を引上げて倒さうとしたが、何分二時間ばかりの猛練習で、精力の大部分を使ひ盡して居るので、思つた程の力が出ず、倒しきれない。敵もさるもの、八分通りは倒れて身體が疊に着かうとしながら、全力を擧げて元の位置に復した。此の瞬間、自分の力は何處かへ飛んで行つて了つたやうな氣がして、ぐつたりした。敵はなか〳〵元氣がよい。どんどん攻めて來る。こちらは只防禦の態度を執つた。僕の疲勞を見て取つた敵は、機會を見て押へ込みの型にはいつてしまつた。只左足だけ僕が引つかけて居るので、正當の型ではないが、若しも此の足を外したら最後、立派な押へ込みだ。僕の疲勞は愈〻加はり、鼓動は益〻烈しくなつた。心の中ではもう駄目かなと思つた。い

つの間にか、僕の左足は外れてゐた。敵は占めたとばかり滿身の力で押へて居る。一同は「よし〳〵、うまい、うまい。」と聲援する。先生は遂に「押へ込み、三十秒！」と叫ばれた。もうどうすることも出來ない。平生ならうんと頑張るけれども、今は只足をばた〳〵と眞似かたに動かすばかり。息を二三遍したかと思ふと、拍子木がかち〳〵、續いて、「一本！」と先生の聲。負けたことは負けたが、ほつとした。併し口惜しかつた。下級生に負けたかと思ふと、……いや、一年三百六十五日だけ多く練習してゐながら負けたかと思つて口惜しかつた。自分が疊に坐ると、一同の視線が一時にこちらに集つた。自分は態と平氣を裝つたが、心の中では泣いて、「此の次を見てゐろ。」と叫んでゐた。（和田生）

二　走高跳

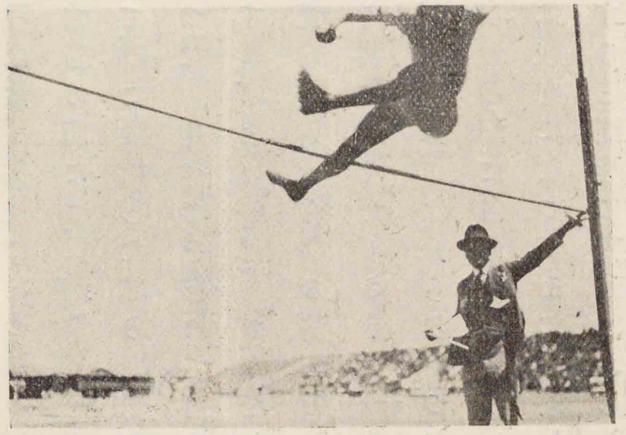
スタンドの四圍から眺めて居る觀衆の視線が、コースにあるの

かフィルドにあるのか、そんなことは何でもなかつた。フィルド（Field）に立つてからは、自分の氣持が自分に分らぬ程に緊張して、大膽になつてゐた。只自分の周圍に集つて居る高跳の競技者達の顏付だけが、其の實力を知らぬため、恐しく自信ありげに見えるので、少からず自分の自尊心を脅かされた。併し、自分が相手を知らないと同じく、相手もまた自分の實力を知らずに恐れて居る筈だと思ひ返して、聊か安堵の胸を撫下した。

さて、競技が始まつて見ると、自分の自信はまたむく〳〵と頭を擡げて來た。三尺五寸に始まつて、追々跳んで行く中、一段々々高さの增す毎に三人五人と減員されて、四尺七寸位になつた時は、三十五人の競技者が最早十人足らずになつてゐた。これは相手の技術が其の逞しい面魂に似げないことを證明するものではなからうか。

白兵戰　白刃を揮つて接戰すること、こゝは競爭のはげしさが頂點に達したことをいつたのである

それから高さが一寸五分位增す間に、人員は三人になつて了つた。今は四尺八寸五分の高さ。自分が一番に跳ぶことになつた。戰は愈〻白兵戰になつたのだ。自分はきつと目標を睨めて立つた時、目の前には、只幻――輕く踏切ると同時に、身體は輕く宙に浮いて、鮮に跳越した其の瞬間の神のやうな自分の幻の外、何物もなかつた。凡べてを忘れて、自分は其の幻に自分の身體を當嵌めさへすればよいのだ。で、うんと下腹に力を入れて力强く走つた。直覺的に與へられる踏切の點、其處で滿身の力を籠めて、身は高く心と共に跳んだ。さうだ、跳んだに過ぎない。どのぐらゐ高く跳んだか、自分には分らなかつた。只身體に何物も觸れず、自分は確に自分の幻に自分を當嵌めたことを自覺した。落ちかゝる瞬間、身は後向になつてゐた。果して横棒は靜に止まつてゐた。ほつとすると同時に、自分はどしんと地上に落ちた。拍手が雷のやうに



走高跳

げた、禁物だと知りながら。三番目の人が平氣で易々と跳越して行つたことは、少からず私を起つた。自分は始めて觀衆の視線が悉く自分の上にあることを感づいた。そして、今更のやうな誇らしさと恥かしさとを感じた。

次の人は十分の決心を面に漲らして、勢凄じく跳んだ。併し、殘念なことには、――私は心の底では確に喜んだことを否定することは出來ないが、遂にしくじつた。自分は王樣のやうな氣持にならずにはゐられなかつた。自尊心が急に頭を擡けれども、それは暫くの間だつた。第

脅威すると共に、怖るべき强敵であることを思はせた。

それから五分高められて、第二番目の人は退いた。戰は愈、私と他の一人との二人の間になつた。其の時、私はどうしても其の人に後れを取るのではなからうかといふ豫感が、たまらなく私を苦しめた。

レコード（Record）は四尺九寸となつた。愈、二人だと思ふと、私の胸は高鳴つて來た。今までは氣づかずにゐたけれども、身體が非常に疲れて居る。もう此の上元氣が出さうにもない。私は暫く芝生に横臥したが、落着きさうもない。まゝよ、僅か五分の差だと思つて、規定の位置に立つて見た。けれども、疲勞と觀衆が妙に目につくのとに加へて、相手の餘裕ありげな樣は、どうしても私に氣を落着けさせなかつた。暫く瞑想してから、僅かの落着を見出して、一所懸命に駈出した。目前にある凡べてのものを呑込むやうな氣合

で駈けた。勢込んで跳んだ。あゝ美事。併し、横棒は？　万事休す！　からんと乾ききつた音を立てて私の側に落ちて來た。そして、其の後には夜のやうな淋しさが殘つた。涙がはら〳〵とこぼれた。照りつける晴れた日に目暈さへ感じた。けれども、相手の人の成績の如何が氣になつて、私は漸くにして自分の席に歸ることが出來た。

相手の人も亦緊張しない譯に行かなかつたらしい。必死の樣を面に表して、物凄い氣合と共に走つた。ぱつと踏切つた刹那、美事！　それは實に美事だつた。觀衆の拍手の起る前に、私は先づ敵のために拍手を送らずにはゐられなかつた程、それは鮮かなものだつた。續いて急霰のやうな拍手が四圍に起つた。

やがて、私は芝生の上に寢そべつた。「駄目だ！」といふ囁が段々強くなつて來た。白熱化する太陽の輝きに汗がだく〳〵と流れ

落ちた。（佐藤生）

一二　殘暑

清水濱臣

清水濱臣、江戸の人、江戸時代後期の國學者、文政七年（一八二四）歿、年四十九

土さへさくる心地したるほどは、ことわりの暑さに思ひなして、さまでも覺えざりしを、御祓川に流しやりつるやうに思ひすてたる夏のなごり、またもたちかへりて、昨日今日となりてはなか〳〵に堪へがたく覺ゆるよ。あやしくさるべきことどもこそあらねど、さるは庭のさまを見るにもしなえよらるゝばかりの日影ともなく、袖ふく風も身にしみそめぬるに、いかなればかく覺ゆるにはあらん。思ふに、心のたゆみにこそはありけれ。

心のたゆみばかり口をしきものはあらじ。よろづの學びの道もしかこそはあれ。初學のほどは、いかでと思ふ心のすゝみより、宵曉につとめはげみて、文机にむかひても春の日を短う、秋の夜を

長からぬやうにのみ覺ゆるを、いさゝか物の心しりえて後は、いつとなく怠りゆくならひより書をひらきては見るに物憂く、筆をとりては書くに心つかれて、はて〳〵は文机の上にうつぶしかゝるめり。いと口をしきことならずや。

殘るあつさの堪へがたきは、かくていつまでかはあらん。こゝろたゆみもさてあるべし。學びの道のおこたりは、年ごとにいとどしくなりまさりなんと思ふからに、われと心にいましめまほしくこそ。（遊京漫錄）

一三　擬古文斷片

一　おのが歌

加藤千蔭

おのが歌をしもみづからえらびて世に殘せるためしいにしへなきにしもあらねど、そもきはことなるあたりにこそさることは

加藤千蔭、橘氏、江戸の人、江戸時代後期の國學者、文化五年（一八〇八）歿、年七十五

あらめ。どわがともがらのまねばんはおふけなきわざなれば、思ひもかけざりしを、おのれすでに年たかくなりにたれば、みづからよくえらびおきてよなど、やんごとなきかたゞ〳〵よりねもごろにそのかしたまふをいなみなんもなか〳〵にて、えらび出でん心とはなりぬ。（うけらが花序）

二　松のとぼそ

村田春海

松のとぼそ萱ののきどもいとこそさびたるに、おのづからなる竹むらをまがきに結ひなして、堰きいるゝ水のながれいさぎよく、石のたゝずまひことさらならずしなして、庭のつらいとひろらかなるに植ゑそへたる千本のかげは、色に香にとりならべて、露を

加藤千蔭

村田春海、江戸の人、江戸時代後期の國學者、文化五年歿、年六十六

伴蒿蹊（名は資芳、江戸時代の人、江戸時代の國學者、後期の文化十三年歿、年七十四）

藤井高尚（江戸時代の國學者、後期の天保十三年歿、年七十七）

ねたみ霞にきほへるけはひ、この世のものとしもおぼえず。（琴後集）

三　蹴鞠のわざ　伴蒿蹊

蹴鞠のわざの立合に、人には蹴よきやうにしてわたし、蹴にくきところをとりてあつかふなど、よろづの心ばへからましかばと思はるゝをそのわざにのみとゞまりて他の交にうつすべきことも知らぬは念なし。されども、さすがに勝負を爭ひ、我よく人あしかれと思ふさまには似ず。（閑田耕筆）

村田春海

四　秋の山田　藤井高尚

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ鹿・猿おどろかし、谷川の流にかけたる引板のおのれと音するなど、取りあつめてあはれなること多かり。かく心をつくしてもるとすれど、曉近うなりてはうちまどろむにやあらん、物の音なひもたえぐなれば、小屋近く鹿のより來つゝ、何のかひよとうち驚かなきたるは、いざたなさをいさめがほなりや。（松屋文集）

中島廣足（熊本の人、江戸時代の國學者、後期の文久四年歿、年五十一（或は五十三ともいふ））

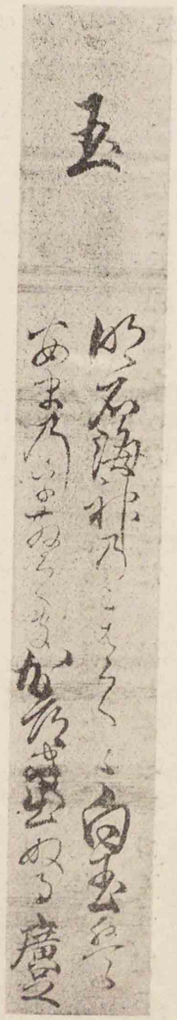
五　あまの住家　中島廣足

あまの住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめにつくりたる藁屋

伴蒿蹊筆蹟

おとうとらにもかしるわざはせさせじ世のわたらひの障にはなさるゝかたへに人なまるがうに異やうにはじめなりゆくとて爪はこしばきをかみのあれこしきをすくかゝるにしうしかからのなをもなしがきとなしてゝ蠶の住家はむしかからすや

明石海神のこゝはし〳〵白玉はあまのをさしぞかづき出ぬる　廣足



廣足筆蹟

どものさま、浪うちよせなばやがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さて住みなば何心地かせましと思ひやるだにこゝろぼそし。（檀園文集）

親　源爲義
兄　頼賢・頼仲・爲宗・爲成

一四　鎭西八郎

こゝに鎭西八郎爲朝は、「我は親にも兄にも具すまじ、功名不覺もまぎれぬやうに、たゞ一人いかにも强からん方へ差向け給へ。」とひ千騎もあれ万騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。」とぞ申しける。よつて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衞門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたる事、武勇天下に許されし故なり。件の男器量人に超え、飽くまで剛にして、大力の强弓、矢繼早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば惡しかりなんとて、父不孝して、十三の歳より鎭西の方へ追下ずに、豐後國に居住し、尾

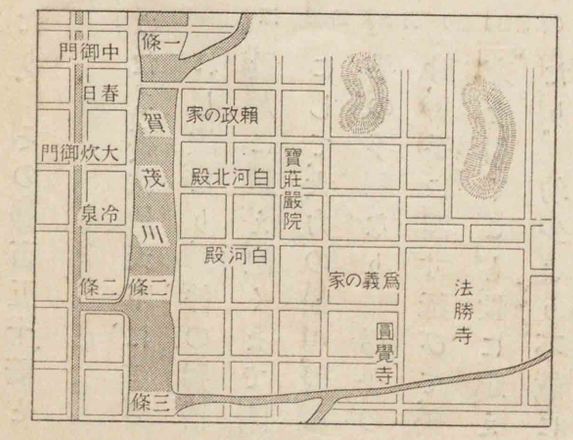
源爲朝（菊池容齋筆）

張權守家遠を傳とし、肥後の阿曾、平四郎忠景が子に三郎忠國が婿になつて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へんとしければ、菊池・原田を始として、處々に城を構へて立籠れば、「その儀ならばいで落して見せん。」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十個所なり。

城を攻むる謀、敵を討つ術、人に勝れて、三年が中に九國を皆攻落して、みづから總追捕使におしなつて惡行多かりけるにや、香椎の宮の神人等都にのぼり訴へ申す間、往にし久壽元年十

香椎の宮　筑前國福岡の東一里、神功皇后を祀る、今は官幣大社

久壽　近衛天皇の年號（一一五四―一一五五）



宰府　筑前國太宰府

一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば、我こそ如何なる罪科にも行はれんずれ。」とて、急ぎ上りければ、國人

共も上洛すべき旨申しければ、「大勢にて罷上らんこと、上聞穩便ならず。」とて、形の如く附從ふ兵ばかり召具しけり。よつて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。

八龍　源氏重代の鎧

樊噲・張良　ともに漢の高祖の臣

吳子・孫子　吳起・孫武、ともに支那古代の兵法家

養由　楚の人、弓の名手

上皇　崇德上皇

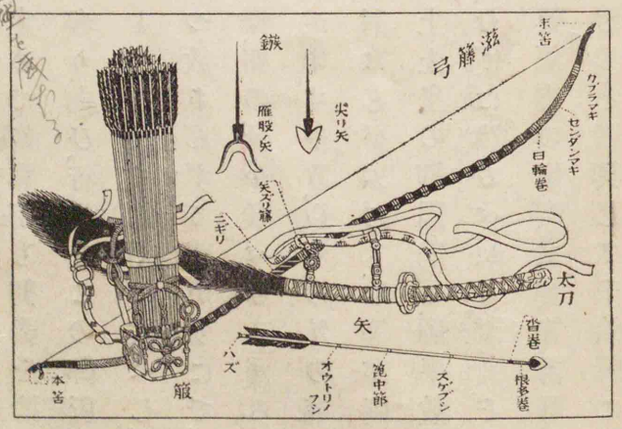
爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地にいろいろの糸を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈌打つたるに、三十六差したる黑羽の矢負ひ、兜を ば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること吳子・孫子が難しとするところを得、弓は養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めたてまつりて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて擧り給ふ。

左府　左大臣藤原頼長

高松殿　後白河天皇の御所

主上　後白河天皇

左府即ち「合戰の趣計らひ申せ。」と宣ひければ、畏つて、「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について、大小の合戰數を知らず。中にも折角の合戰二十餘個度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること夜討に若くこと候はず。然れば、唯今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れんものは矢を免るべからず、矢を恐れんものは火を遁るべからず。主上の御方心にくいも候はず。たゞし、兄にて候義朝などこそ驅出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。



まして清盛などがへろ〳〵矢、何ほどのことか候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所べならば、御免されを蒙つて、御供のもの少々射んずるほどならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃去り候はんずらん。その時爲朝參り向ひ、行幸をこの御所へなし奉り、君を御位に即け參らせんこと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ參らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。」と、憚るところもなく申したりければ、左府「爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。年の若きが致すところか。夜討などいふこと、汝等が同士軍十騎二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國爭に、源平數を盡して兩方にあつて勝負を決せんに、むげに然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實、玄實等、吉野十津河の指矢三町、遠矢八町といふものどもを召具して、千餘騎に

て參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉こゝに參るべし。彼等を待調へて合戰をば致すべし。また、明日、院の司の公卿・殿上人を催さんに、參らざるものどもをば死罪に行ふべし。首を刎ねること兩三人に及ばば、殘りはなどか參らざるべき。」と仰せられければ、爲朝、上には承服申して、御前を罷立ちてつぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたるものなれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延べばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戰ふともいかで利あらん。敵勝つに乘るほどならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。」とぞ申しける。（保元物語）

瀧澤馬琴
名は解、江戸時代後期の小説家、嘉永元年（一八五八）歿、年八十二

御墓
崇德天皇の御墓

一五　兒が嶽

瀧澤馬琴

かくて、その日も暮れなんとするほどに、と見れば、群鴉星を負うて茂林に歸り、樵夫月を戴いて家路に急ぐ。かごとがましき虫の音に、葉末の露ぞ濃やかなる。既に人迹絶えければ、爲朝は古りたる木のもとに立ちよりて、衣服を更め、御墓に詣でて見れば、千草は一叢の烟を殘して、玉殿燈なく、秋螢は五更の夜を照らして、荆棘路を塞げり。百石城や百官は紫の袖を連ね、朝政きこしめしける十善の君として、宿世の惡業は免れ給はず、青塚苔滑かにして、白楊風に戰ぎ、旅魂・幽靈今何處にかさまよひ給ふやらん。げに人界の富貴

崇德天皇（集古十種）

妻子云々
妻子珍寶及王位、臨ニ命終一時、無ニ隨者一（大方等大集經）

二首の歌
山家集にある新院崇德上皇

仁安
六條天皇の年號（一一六六―一一六八）

は夢の中なる快樂にて、妻子・珍寶及び王位も、身死しては伴侶ならず。されば、とて、三界の火宅を出でて、永く九品の淨刹に至らんことは數ならで、すゞろに涙ぞ先立ちける。これを見かれを思ふにも、我が身のは、御廟の柱を見上ぐれば、二首の歌を書きたり。

「讃岐に詣でて、松山の津と申すところにて、新院おはしましけん御跡を尋ねしに、かたもなかりしかば、

松山の浪にながれて來し船の
やがて空しくなりにけるかな。

白峯とまをす所の御墓にまゐりて、

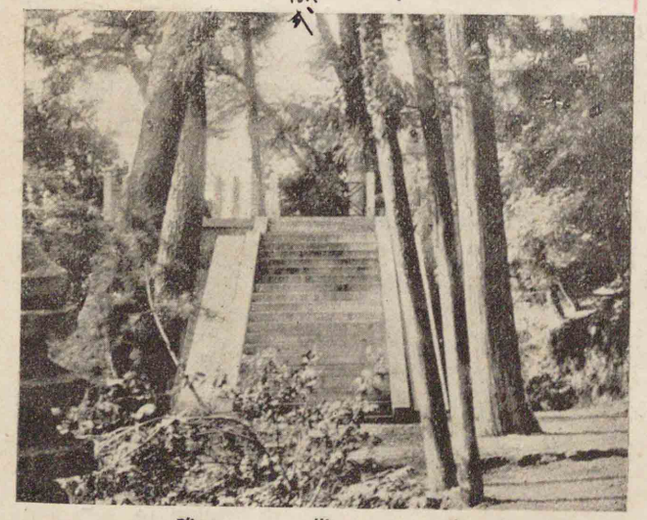
よしや君むかしの玉の床とても
かゝらん後は何にかはせん。

仁安三年十月日　圓位」

西行法師
俗名は佐藤義清、鎌倉時代の歌僧、建久元年（一一九〇）歿、年七十三

とあり。さては西行法師も去々年の冬こゝへはまゐりけんとうかべつゝ、石の玉垣の斜なる扉を押開きて蹲踞し、さて申すやう、

「君十善・万乘の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かし給ひしも、今は懷土・望郷の魂、玉體を南海の俗に混ず。露を拂つて御迹を尋ねたてまつれば、秋草泣いて涙を沃ぎ、嵐に向つて君が墓を問へば、老檜悲しんで心を傷ましむ。佛儀は見えずして、たゞ朝雲・夕月を見る。法音は聞えずして、たゞ松響・鳥語を聞く。軒かたむきては曉風寒く、夢やぶれては、夜雨防ぎがたし。



白峯陵

大島
伊豆七島の一

昔・今の御有様いと痛ましくも淺ましく思ひたてまつれど、微臣が孤忠を述ぶるによしなく、既に勢竭き力究まつて今生の誠忠を訴へ、後世の苦樂を共にしたてまつり、君につれなかりつるものどもを悉く取殺さばやと思ふのみ。圖らずも大島を遁れ來て、尊靈を驚かしたてまつるものなり。」と申しはてて、涙を潸々と落しつゝ、やがて氷なす短刀を拔きて腹に突立てんとするに、怪しきかな、手足忽地に癱瘓れて、いかにともすべなし。時に兒が嶽の方に叢雲たなびきて、月は半面を顯しながら影いと暗く、電閃なく閃きて御墓の中に散徹し、山颪のいと凄じきに、吹きちる木の葉もろともに、武者四五十騎前驅して出で來たり。次に、腰輿を舁くものはすべて象の鼻、鳶の喙にて、左右の腋に翅生ひたり。こは怪しと見るほどに、やがて御輿を墳のほとりに杠き据ゑしかば、武士は二帶に列を整へて蹲踞し、警蹕の聲と共に、御輿の中より玉音高く、

この朝倉の木の丸殿の跡を假宮にたづねて来た爲朝を定めて歸すまでも朝倉をたゞいたづらにかへすにも、釣する海士の音こそ泣かるれ。

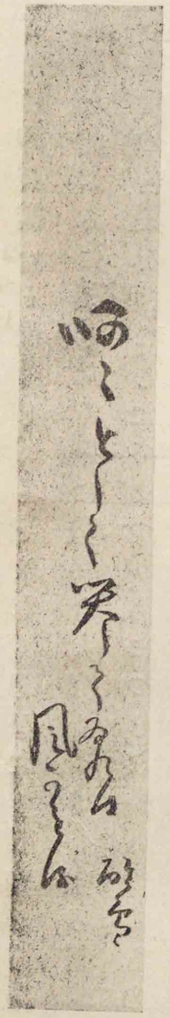
と一首の歌を口號み、やをら下りたちて、まうけの袿に就き給ふを見たてまつれば、新院此の世におはしける日の面影につゆ違はせ給はず、思ひしよりは窶れ給へり。（椿說弓張月）

一六　近代の俳句　（明治）

老梅の梢に遠し雪の山。　　醒雪 故

西瓜太郎躍り出でよと割つてけり。　　瓊音 故

たゝかれて晝の蚊を吐く木魚かな。　　漱石



醒雪筆蹟

句佛　大谷光演

蝶衣　高田四十平　故

呵々として笑うてゐれば風かをる　醒雪

瓊音　沼波武夫　故

漱石　夏目金之助

うまごやし桃色につゞく夢の行くへ　瓊音

繞石　大谷正信

四方太　坂本氏、號は文泉子　故

乙字　大須賀績　故

紫影　藤井乙男

本堂は十八間の寒哉　漱石

自ら蚊帳もる念佛すゞしさよ。　　句佛

魚くづをかもめに投げつ冲なます。　　蝶衣

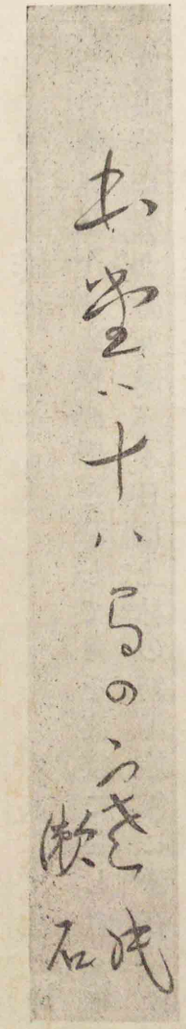
かひがらに秋の灯ほそし蜑が家。　　繞石

語草すでに盡きぬる夜長かな。　　四方太

落葉ごと寒鮒網に入りにけり。　　乙字

汐木拾ふ浦の日和や冬の海。　　紫影

瓊音筆蹟



漱石筆蹟

一七　俳話だより

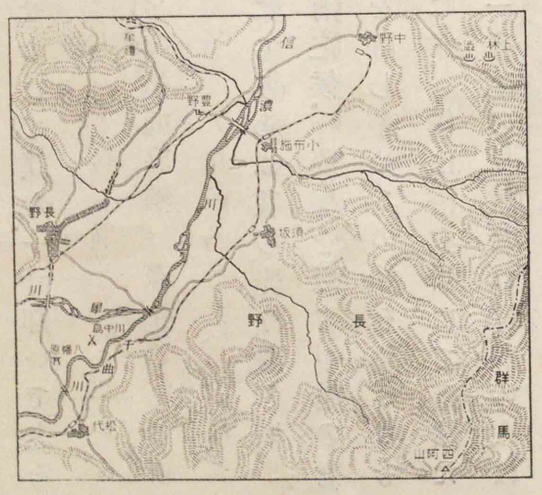
末松青萍
名は謙澄、福岡縣の人、文學博士・法學博士、子爵、樞密顧問官、大正九年六十六歳、竹嶼、松田氏、當時長野新聞記者上林、長野縣下高井郡

竹嶼兄足下。　先夜洋燈を滅して月を高樓に賞したる雅趣は、猶眼前に殘り居り候。　本日は上林（かんばやし）の新湯旅館に滯在致候が、矚望極佳に候。　但し、午下驟雨、晩來天曇り、究竟の滿月未だ雲端に笑まざるは遺憾に候。　今朝貴地の新聞紙に、僕昨日川中島を憑弔したれば、必ずや懷古の作あるべきを記せり。　而も實際は何等の詩句もなく、却りて歸路車上の睡眠中蝙蝠傘を遺失したる樣の次第に候。　唯足下は俳話を好まるれば、途中にて聽きたる一話を左に御報申上候。

川中島八幡原の小祠

八幡原
長野縣更級郡
川中島

八幡（はちまん）原（はら）にて、小祠前の石に腰打掛けたる際、偶〻一少女を伴へる一人の男來りて、同じく近邊の石に憩ひ申候。　年齡は四十歳前後にもあらんか、長途の旅行者とも見えず、官吏・書生とも見えず、農商とも見えず候。　其の人不圖僕の車夫と詞を交へ、何か俳句の事を言出で、「村方の人達はこんな事は上手だ。」云々。「にらみあふ花の光や。」云々。「麥植ゑて。」云々。「判者にも好き不好きのあるものかな。　俺なら『にらみあふ』を秀逸とする。」など語り候。　餘程の熱心家と見え申候。　能く聞けば、此の八



高田
新潟縣

幡の小祠の扁額の集句の事を評せるにて、僕も一寸仰いで之を見しに、天の位置の句に、

麥植ゑて矢の根掘りけり畑の中。

とあり、人の位置の句に、

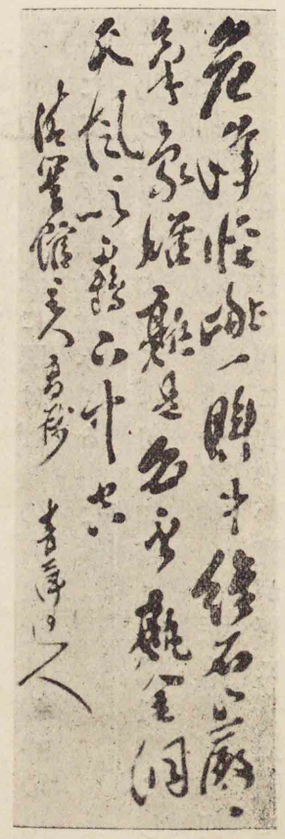
末松青萍

にらみあふ花の光や菱と桐。

と有之候。菱・桐を以て甲越の對抗を評し盡せるの妙を語れるものに候。僕は浴衣掛にて宛然たる一書生の扮裝なれば、其の人は僕の何人なるかに氣付きたる樣子無之候。之を幸に、僕も傍より時々口を出して、其の談話を續けしめ申候。其の人自己の俳句入門の經歷を語りて曰く、「年期奉公に往つて居つた時、高田邊の人が主人の處に來て、春日山扁

春日山
高田市の附近、上杉氏の城址がある

松崎大尉
名は直臣、熊本縣の人、陸軍大尉、明治二十七年朝鮮で戰死した



末松青萍筆蹟

危峰怪巘一眸中、
維石巖々氣象雄、
孰是白雲孰金洞、
天風吹レ鶴下二中空一
清轟館主人高屬
青萍迂人

額の秀逸だといつて、

海暮れて山は櫻の光かな。

と云ふのを聞かせた。成程面白いものだと感じ、何とか之をもぢつてやらうと考へて居つたが、其の後、集句のあつた時、

野は暮れて峯は紅葉の夕日かな。

として出した所、大變褒められた。それから俳句が面白くなつて來た。」云々。「先年『松崎大尉の戰死に』といふ題で、

果てた後名も美しき蠶かな。

と詠んだ。是は大阪の或雜誌の第二十二號に出て居つて、十五圓の賞金を得た。併し、或人は、

　姿なき風に繪を見る柳かな。

と詠んで、五十圓の賞金を得た。五十圓だけあつて、私のよりずんと秀逸だ。云々。「何でも點取には點者を考へて詠まねば損だ。七十八十の老人達には、戰のことや理づめの事は分らぬ。とぼけた事でなくてはいけぬ。勿論とぼけた事でも亦妙處はある。云々。頓て立別れ、僕等は松代（まつしろ）方面へ、彼は長野方面へ向ひて去り申候。車夫に聞けば、彼の人は元此の邊の出生にて、今は長野にて鍛冶業を營み居る由に候。

松代　長野縣埴科郡、川中島を隔てて長野市と相對してゐる

　此の談話によつて、俳句が如何に平民文學にして、之が吟詠者の如何に平民間に多きか、又此の平民文學が如何に變化して行きつゝあるか、且如何に此の事實が既に平民間にも了解せられ

初めたるかを知ることを得申候。而して吾兄の如きは、かの男の言ふ所の戰のことや理づめの事を十分解し居らるゝ事なれば、此等の消息を聽かるれば、或は莞爾として笑まるゝならんかと存じ、蛇足ながら一筆啓上如此御座候。

　此の文未だ草し終らざるに、雲少しく破れて、月天半に現れ出で申候。（現代名家書簡集）

佐々醒雪　名は政一、京都市の人、國文學者、文學博士、東京高等師範學校教授、大正六年歿、年四十六

一八　短き詩歌

佐々醒雪

　日本の文學史が長篇の詩歌に乏しきは、固より慶事といふべからず。而もその所謂詩歌が專ら短小なる形式なりしがために、纔に文字あるものは皆これを弄ぶことを得たるは、日本國民の文學的嗜好の流布に尠からざる効果を與へたりと謂はざるべからず。試に思へ、藤原・奈良の古より、梅が枝かざす大宮人はいはずもがな、

藤原　持統・文武兩天皇の御代

東陲僻遠の民もなほかの東歌に天眞の情を寓せしもの、凡べて五句の短歌といふ形式が流行せしの致せし所ならずや。平安朝に及んでは、やがて歌詞に高古の弊を生じて、漸く中流以下の國民を和歌以外に置きし憾なきにあらずと雖も、なほ世々の細民の歌謠は街衢・畎畝の間よりも出でて、往往勅撰に列する光榮をさへ得たるは、また短詩形の力にあらずや。假に万葉時代の四民が凡べて歌謠を弄するを得たるは、未だ分業の發達せざりし時代の現象なりとせんも、文化既に見るに足るべき平安朝に至りても、歌人と稱するものは凡べて朝廷の官人、作歌のことは凡べて公務の餘業にして、その特別なる專門家を生じ、師傳・口授

佐々醒雪

人丸　柿本氏
赤人　山部氏
憶良　山上氏
家持　大伴氏
旅人　大伴氏

のこと起りしは平安朝の末期に屬するのみならず、歌を作ることは當時の貴紳としての必然の修養として數へられたりしが如きは、皆これ詩形の短小なりしに歸せざるべからず。万葉時代は長歌の最盛期なりき。而も若し長歌のみを以てすれば、巧妙を以て稱し得べき作者は、人丸・赤人・憶良・家持・旅人以外、そも幾人をか算し得べき。短歌を外にすれば、万葉時代もなほ四民悉く歌壇の人なりしとは謂ふべからざるなり。

平安の末葉、大綱弛廢してより源平亂麻の時、北條勤儉の世、四民はまた優遊・吟哦を事とする能はざりしなり。されど、その小

柿本人丸（藤原信實筆）

山部赤人（藤原信實筆）

兼好　吉田氏、本姓は卜部、文學者、正平五年（一三五〇）歿、年六十八

守武　荒木田氏、室町時代の俳諧主唱者、天文十八年（一五四九）歿、年七十七

宗鑑　山崎氏、守武と同時代の俳諧主唱者、天文二十二年歿、年八十九

貞門　松永貞徳の俳風、寛永頃

談林　西山宗因の俳風、寛永頃

蕉風　松尾芭蕉の俳風、元祿頃

江戸座　實井其角の俳風

美濃派　各務支考の俳風

大伴旅人（菊池容齋筆）

足利期の地下連歌流行は言を俟たざるべし。降つて守武・宗鑑が俳諧、元和偃武の昌運に乗じて、終に貞門となり、談林となり、更に蕉風となり、江戸座となり、美濃派となり、天明の復興となり、他面に於ては、前句附となり、川柳點となり、武門に入り、商家に入り、俳優・幇間皆俳名を有し床屋・肴屋悉く點取を爭ふに及んでは、また

荒木田守武

天明の復興　謝蕪村、炭太祇、與謝蕪村等の俳風をいふ

指貫　指貫を足でぬぐ夜や朧月（蕪村）

古池　古池や蛙とび込む水の音（芭蕉）

盛ならずとせず。この間固より一面には惡趣味を流布し、天眞の鑑賞力を蔽ふことなしといはず。さあれ、一般社會の趣味如何に低くとも、吟哦・諷誦のことを解するに至りしものは、皆短詩形流行の効果ならずんばあらず。

西山宗因

抑、短き形式の間に稍複雜なる意志を寓せんとせば、必ず暗示の力を假らざるべからず。暗示とは、例へば、「指貫」といひて優に麗しき大宮人を想見せしめ、「古池」とのみいひて閑寂なる境を想像せしむるの類なり。かるが故に、短詩は多く類型を謠ふ。指貫の常に優美なるのみならず、春の夕の長閑かならぬはなく、秋の夕の寂しからぬは稀なり。これ既に詩想の上の大なる拘束ならずや。加之、一事物より來る人

人の印象は、その境遇・性質等によりて、固より同一なることを豫想すべからず。されば、古池に對して閑寂の美を愛する者のみ「蛙飛びこむ水の音」に更に一段甚深の興味あらん。古池の溷濁・汚穢を聯想する者は、蛙の水音に對しては何の美感をも惹起せざるなり。古の名歌・名句と稱せらるゝものにして、往々解釋に異說多く、或は常人に偉大の感興を與へざるものは、その境遇の異同に因ること多しとす。されば、若し此等の障礙を排して、よく一般の讀者に同情せしめんと欲せば、勢ひ最も普通なる事物の中に就いて、最も相近き聯想を惹き得べき現象のみを採りて詩材とせざるべからず。古の和歌が動もすれば花月の天地に限られ、後の發句もまた遠くこの樊籠を

松尾芭蕉木像

脫し得ざりしものは、實に歌人的思想或は俳諧的事物にあらざるよりは、容易に理解同情せらるべき作物を成す能はざるもの、これが主因にはあらずや。

上古純朴の世、四民はその境遇に於て、後世の如き甚しき異同なきのみならず、その詩歌の同情を求むる所、また狹隘なる隣人の外に出でず。封建の世に及んでは、士農工商各、その樊籠の裡に在りて、互にその吟哦を上下するのみ、敢て出でて一般の社會にその繡腸を誇示せんとするにはあらず。如上の缺點ある短き詩歌の然く流行の勢を得たるもの、一はこれが爲ならずや。かの俳人・歌人を以て職となす者と雖も、また同好の間に於てす。歌人は俳人に示さんとせず、俳

各務支考

人もまた歌人に示さんとせず。俳句は俳人の文學にして、和歌は歌人の文學のみ。かるが故に、歌詞・俳語彌〻多くして、彼等は特に不便を感ぜざりしなり。

純朴は複雜となりぬ。封建は破壞しぬ。我等は固より四民共通の文學を求めざるべからず。これ即ち文學者の任務なればなり。こゝになほ短歌・俳句を生命となし、文士を以て自ら居らんは、固より現代文士のことにあらざるべし。

さあれ、天下の人盡く文士たるべき要なし。我等は、なほ清き娯樂として、春宵一刻、歌を思ひ句を練らんことの最も適當なるを思ふ。予嘗て曰く、「弓箭は古の武器なりき。されど、古の武器は今の武器にあらず。たゞ適當なる遊戯として弓術の存在を許さんのみ。」と。若し勇しき古の武藝が能く尚武の氣風を養はば、文字の遊戯はまた多少の趣味を啓發せずとせず。殊に武藝が體力を養ふ

如く、短詩の遊戯は多少の筆力を與ふべし。されば、予はたゞ遊戯としてのみ短き詩歌の價値を認むるなり。（醒雪遺稿）

自修文

一九　動物園の獅子

厨川白村

厨川白村、京都の人、文學者、文學博士、京都帝國大學教授、大正十二年歿、四十四

狷介　自分を守固く人と相容つてゐない性質

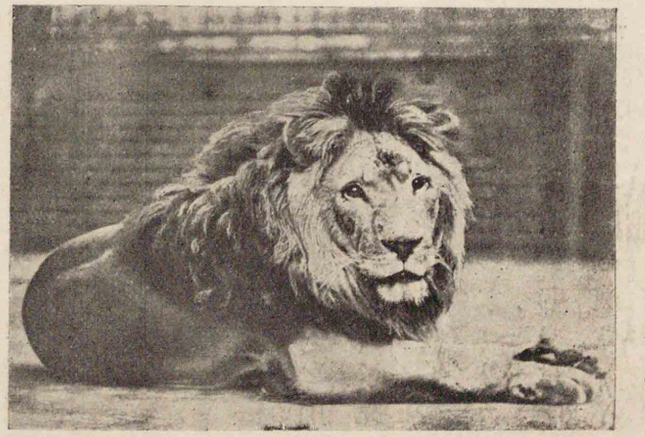
若沖　伊藤汝鈞、京都の人、畫家、寛政十二年（一七八〇）歿、年八十五

狙仙　森守象、長崎の人、畫家、文政四年（一八二一）歿、年七十五

「よい歳をして。」と笑はれることであらうが、私は子供の手を引いて動物園に行くことが好きだ。實は子供よりも私が動物に見とれてゐるのである。孤高・狷介の高士を想はせるやうな淨らかな白鷺や、惡口屋のやうに嘴ばかり無暗に大きく發達したペリカン（Pelican）も面白いが、殊に猛獸が好い。獅子の鬣、豹の斑點の美しさは言ふまでもなく、あの無恰好な顏を右左に振り、大きな爪をがさ〳〵と音立ててゐる羆なども可愛いものである。じつと見入つてゐると、雞を描いた若沖、猿ばかり描いてゐた狙仙などのやうに、一生特

に好んで動物を描いた畫家の心持などもよく分る。

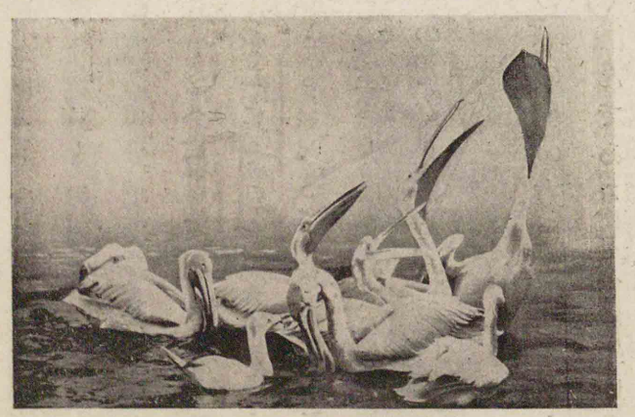
百獸の王獅子がゐる。あれは獅子だ、確に獅子だ。が、鐵柵で嚴重に圍まれた檻の中にゐる。よく考へ直して見ると、あれは獅子ではない、獅子性を失つて、たゞ獅子の形をしてゐる他の或動物だ。あれは獅子だと思つて觀るのは、美しい豐かな人間性を失つてしまつた或種の人間を、眞の人間だと思つてゐるのと同じ誤だ。この獅子は父祖の代から檻の中に生れて檻の中に育てられ、獅子の獅子らしさを失ひ、純眞な獅子性を忘れてゐる。山野に



動物園の獅子

白鷺

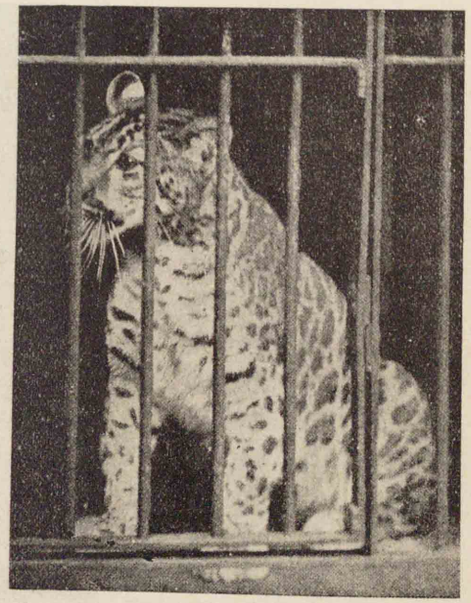
た代りに、尾を振つて飼主の鼻息を窺つてさへゐれば、番人の手から食物が貰へることを知つてゐる。熱國の夜、月に向つて巖頭に嘯く自由のない代りに、牛肉だの牛乳だのの美味が與へられる。冬になると暖房の設備まで餌をあさつて飢餓と戰はなくても濟むやうになつ



ペリカン

てゐるやうに見える。

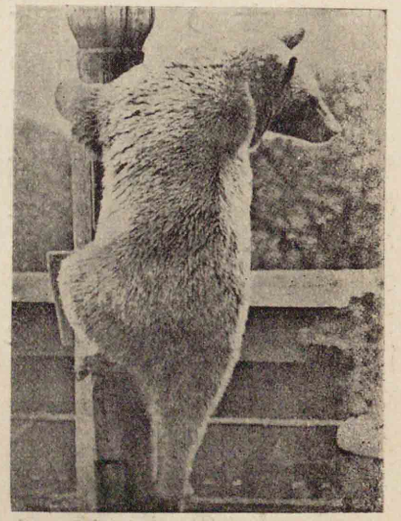
しかし、動物園の獅子にでも、その腹の奥の奥の方には、昔山野を放浪してゐた頃の純眞な獅子性が深く潜んでゐる。ふと生血の一滴でも味つた時とか、或はまた、あの堅苦しい檻の中で、夜半の夢のまどかでない折とかには、思ひがけなく猛獸の野性は突如としてもらへる。あれが文化生活とかいふのだらう。もう自分が獅子であることさへ忘れてしまつて、めつたにそれを思ひ出さうともしない。なあに獅子の生活とは元來こんなものだぐらゐに、今では思つ



動物園の豹

万籟　すべての物音
傲嘯　傲然とうそぶく
慴伏　おそれ伏す

て身内に甦つて身を焦すことだらう。天外万里の雲漠々たるアフリカ〔亞弗利加〕Africaの曠野、――自分の、或は幾代か前の父祖の故郷を夢みては、はかない想望・思慕の情をも禁じ得ないことだらう。私の家から動物園までは僅に二三町の距離だ。人の寢靜まつた夜更などに、獨り書齋で仕事をしてゐると、屢〻あの獅子の巨吼を聽く。万籟寂として音のない時、大地の闇を搖がすあの力強い聲は、讀んでゐる書物などよりも更に幾倍かの強さと深さとを以て私の胸に迫る。併し、思へば、あの聲は、昔山野に傲嘯して百獸を慴伏させてゐた頃の獸王の聲ではない。幾年か、また幾代かの間、鐵檻の中に閉込められた幽囚の身



動物園の羆

が、自由にあこがれ、自然境を懷かしむ鄉愁の悲調とこそ聞くべきだらう。それは忘れようとしても忘れがたい野生の叫び聲である。ルソーが「自然に返れ。」と叫んでからこの方、人々をして人間性の純眞に目覺めさせた多くの近代思想家の雄たけびを想はせる。

ルソー Rousseau　佛國の哲學者（1712—1778）

雄たけび　雄々しい叫

獅子のやうに大きくて强いものが虐げられてゐるのは、狸や猿や豚のやうなものが虐げられてゐるのよりも、更に痛ましく、更に悲壯だ。狸や豚などは幽閉されてゐても、獅子ほどには苦しまないだらう。否、苦しまないどころか、番人に尾を振つて芋のへたでも貰つてゐる間に、自分が檻の中に入れられてゐることさへも忘れてしまふだらう。それはちやうど、今日一簞の食、一握の黃金のために、自分が尊い人間性の所有者であることをも忘れ果てた人間のやうに憐だ。（十字街頭を往く）

一簞の食　少しばかりの食物

二〇　鷲と鳩

藤森秀夫

鷲の少年が
翼を伸ばして、獲物を窺ふ。
狩人の矢が中つて、
右の翼の筋を切斷した。
彼はミルテの森林の中に落ちて來た。
三日間、彼は苦痛を齒みしめてゐた。
さうして、苦みに
三晩といふもの痙攣してゐた。
竟に凡べてを癒すところの自然の
遍く行渡つた鎭痛藥が
彼を癒した。

藤森秀夫　長野縣の人。明治二十七年生、詩人、富山高等學校教授

ミルテ　Myrte　長春樹

彼は叢林の中から這出て來た。

さうして、翼を擴げた。――だが、

飛躍の力は切斷されてゐる。――

骨を折つても、

地に沿つて進めない。

不釣合な獲物が欲しくても。

さうして、彼は深く悲しみながら、

川のほとりの低い石の上に休んでゐる。

彼は槲の木を見上げる。

さうして、天を、

さうして、一種の涙が彼の高きに志す目を満たした。

其處へミルテの枝を分けて、

鳩の番が葉音を立てて、だらりと飛んで來た。

下り立つて、頸を上下に振りながら、

川ぞひの金砂の上を歩く。

さうして、お互に呼びかはす。

彼等の赤い目は媚を賣歩く。

深く悲しむ者を瞥見する。

雄鳩は好奇心から親しんで

近い叢に飛んで行き、

自己満足をもつて傷者を優しく眺める。

「あなたは悲しんでいらつしやる。」

と、かう彼は甘く慰める。

「元氣をお出しなさい、親友！
あなたは靜かな幸福のための
凡べてのものを此處に持つていらつしやるではありま
せんか。
あなたは日の熱からあなたをかばふところの水枝をお
喜びになりませんか。
あなたは川邊の軟い苔の上で、
夕日の光に、
氣高い胸を張出しなさらないか。
あなたは花の新しい露の間を歩くことも出來ます。
森の藪の中から、
勞せずして得られるところの食物を摘取ることも出來

ます。
銀泉のほとりで、輕い渴を醫することもお出來です。
おゝ親友、眞の幸福は
滿足といふことです。
さうして、滿足は
到る處で滿足します。――」
「おゝ賢者よ！」と鷲はいつた。
さうして、深く眞面目に益、彼は滅入込んだ。
おゝ凡智よ！　お前は凡鳩のやうに語る！（ゲーテ原作）

ゲーテ Goethe. ドイツの詩人（1749—1832）

二一　最後の松陰

高須芳次郎

松陰は九月五日になつて奉行所に呼出された。そして、十月五日再び呼出された。その都度、彼は時局を匡救したい一念に驅ら

高須芳次郎 雅號は梅溪、大阪市の人、明治十三年生、著述家

松陰 吉田矩方、通稱は寅次郎、長門國萩藩士、幕末の志士

九月五日 安政六年

れて、その所信を陳述し、これが對策を告げた。ところが、奉行は彼の言葉に耳を傾けなかつた。「卑賤の身分を以て國家の大事を論議するとは不屈至極だ。控へ居れっ。」と叱りつけた。彼は内心非常に憤つたが、強ひて奉行と爭はうとはしなかつた。「私が申上げたことのために罪に落されるのは、素より覺悟の前でございます。」といつて、沈默してしまつた。しかし、志士が國家のために憂悞して是非の道を究めようとするのを、強ひて抑へつける幕府の意志を測りかねた。

間部下總守詮勝

彼は間部（まなべ）要擊のことについては、幕府は相當に探知してゐるだらうと思つたので、いろ〳〵陳述して見たところが、その實幕府はあまり知つてゐなかつた。そこで、最初に呼出された時に「要擊」といつたのを「要諫」といひかへた。それは同志に累を及ぼすであらうと憂慮したからである。勿論彼は同志の姓名は全く告げなか

つた。しかし、奉行は此等のことを口供書の中に非常に誇張して書いた。彼は十月十六日その口供書を奉行から示された時「書中に『鯖江侯と刺違へて死し、警衛のもの要蔽する時は打拂ふつもり。』と記されてございますが、それは私の斷じていはぬことでございます。」と抗辯し、更に「私はたゞ死を決して鯖江侯を要諫するつもりであつたと申上げただけでございます。それ以外は奉行所で勝手に書入れたのでございます。私はそれを承認する譯には參りませぬ。」といつて、再三奉行と爭つたけれども、奉行は遂に聽入れなかつた。それに、彼が心を籠めて、アメリカ（亞米利加）America に對する方策や、航海のことや、日本の雄略などについて、詳しく進言したことは、一つも口供書に載せられてゐなかつた。彼はそれについても尠からず不滿を感じた。

鯖江侯間部詮勝を指す

さて、彼は口供書のことで略、奉行の心持を悟つたので、「愈、俺の生

命はとても助からぬ。」と覺悟した。そして、死に直面して少しも恐れず悲しまず、安心して靜に運命の到來を待つた。彼はこれについて次の如く獄中で

吉田松陰及びその自贊

三分出レ廬ヲ諸葛已矣夫、一身入レ洛ニ分賈彪安在哉、心師ニ貫高ニ分而無ニ素立ニ名、志仰ニ魯連ニ分遂ニ乏ニ釋レ難才、讀書無レ功分機學三十年、滅賊失レ計ヲ分猛氣廿一回、人識ニ狂頑ニ分鄉黨衆不レ容、身許ニ家國ニ分死生吾久齊、至誠不レ動分自レ古未ニ之有、人宜レ立レ志分聖賢敢追陪

己未五月、吾有ニ關左之厄、時幕疑深重、復歸難レ期、余因以永訣告ニ諸友、謀レ使浦無窮肖吾像、吾自贊レ、顧無窮、知レ吾者、豈特寫ニ吾貌ニ而已哉、況吾之贊乎、諸友其深藏レ之、吾即磔レ市此幅乃有ニ生色ニ也

二十一回猛士藤寅撰并書

己の感想を率直に記した。

「今日死を決するの安心は、四時の循環に於て得る所あり。蓋しかの禾稼を見るに、春種し、夏苗し、秋刈り、冬藏す。秋冬に至れば、人皆その歲功の成るを悅び、酒を造り、醴を釀し、村野歡聲あり。未だ曾て西成に臨んで歲功の終るを哀しむものあるを聞かず。吾行年三十、一事成ることなくして死せば、禾稼の未だ秀でず實らざるに似て、惜しむべきが如し。然れども、義卿の身を以ていへば、是亦秀實の時なり。何ぞ必ずしも哀しまん。何となれば、人壽は定まりなく、禾稼の必ず四時を經るが如きに非ず。十歲にして死する者は十歲中自ら四時あり。二十は自ら二十の四時あり。三十は自ら三十の四時あり。五十・百は自ら五十・百の四時あり。十歲を以て短しとするは、蟪蛄をして靈椿たらしめんと欲するなり。百歲を以て長しとするは、靈椿をして蟪蛄た

義卿　松陰の字

井伊大老
掃部頭直弼

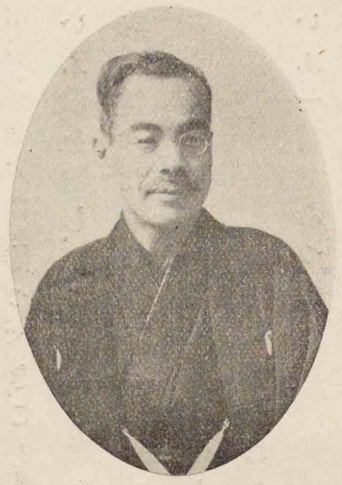
らしめんと欲するなり。齊しく命に達せずといふべし。義卿三十、四時已に備はる。亦秀、亦實、その秕たるとその粟たるとは、吾が知る所にあらず。同志の士、吾が微衷を憐んで繼紹するあらば、乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥ぢざるなり。同志それ之を考思せよ。」

彼はかうして死を靜觀することが出來た。その中、奉行は彼の罪狀を具して、流罪に相當する旨を井伊大老に上申した。ところが、井伊は「流」の一字を塗抹して、「死」の一字を書加へた。それが彼の耳に入つた。彼がこの世にゐる月日はもう長くなかつた。そこで、彼は十月二十日永別の手紙を父兄に宛てて書いた。

「平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出來申さず、非常の爰に立至り申候。嘸々御愁傷も遊ばさるべくと拜察仕候。親思ふこゝろにまさる親心、

けふの音づれ何と聞くらん。

さりながら、十月六日差上置候書、篤と御覽遊ばされ候はば、さまで御愁傷なさるにも及び申さずと奉存候。尙又當五月出立の節、心事一々申上置候に付、今更何も思ひ殘す事御座なく候。此度漢文にて相認め候『語諸友書』も御轉覽遊ばさるべく候。幕府正議は凡べて御取用ひ無之、夷狄は縱横自在に御府内を跋扈致候得共、神國未だ地に墜ち申さず、上に聖天子あり、下に忠魂義魄充ち滿ち致居候得ば、天下のことも餘り御力落し無之樣奉願候。隨分御大切に遊ばされ、御長壽を御保ち成さるべく候。以上。」



高須芳次郎

彼はこの手紙を書終へると、ほつと吐息した。それから十月二十五日「留魂錄」の稿を起して、翌日夕刻に完成した。その時、

呼出の聲待つほかに今の世に、
待つべきことのなかりけるかな。

といふ歌を題し、更に四首の歌を加へた。この辭世の外によく彼の志を述べた歌は、

かくすればかくなるものと知りながら、
已むに已まれぬやまとだましひ。

といふ一首であつた。

二十七日朝、彼は評定所に呼出された。彼が豫期してゐた死刑の宣告が下つた。彼は素より堅く決心してゐたので、少しも驚かなかつた。その顔色も平生と同じやうに見え、午前十時頃、愈、劍手のために首を刎ねられる間際まで元氣であつた。そして、白刃の下に從容として瞑目した。

高山樗牛　名は林次郎、山形縣の人、文學博士、明治三十五年歿、年三十二

北天竺　ヒマラヤ山の南麓、ガンジス河の上流一帶の地

二二　世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば誰かこれを能くせん。釋迦・孔子・ソクラテス・キリスト（基督）の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は、西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、その妻子を捨てて城を逃れ、山林に隱れ、道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河

の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時印度には幾多の哲學ありき。されど、徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふところは畢竟名目の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、衆民をしてその歸依するところを知らしめたり。

釋　迦（曾雪舟筆）

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去る二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら弟子を教へて夙に令聞あり、學德益〻進む。魯の定公の時に至り擢でられて大司寇の職に就く。治績著しく擧りて內外その風采を想望す。時に齊侯魯國の日に〳〵盛大に赴くを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊說を試みぬ。當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにし或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり、强は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。

齊侯景公を指す

孔　子（狩野探幽筆）

教化の陵夷、風俗の頽廢、

未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且大なりといふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くるものなし。こゝに於て已むを得ず老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、我が道遂に窮す。世遂に我を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」と。孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。我が道行はれずんば、我何を以てか後世に見えん。」と。後幾ばくもなくして歿す、時に年七十三。

ソクラテスはギリシャ〔希臘〕Graecia のアテネ〔雅典〕Athênai の一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ西暦紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年を

隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシャの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に留り、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ釋迦當時の印度の如く、人生・社會の實際に關しては殆ど裨益する所なかりき。ソクラテス慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ理を談じ、諄々として倦まず、詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず、侃諤の正義はその稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。然るに、「喬木は風に折らる。」といふ喩に洩れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背くものとしてソクラテスを讒

ステラクソ

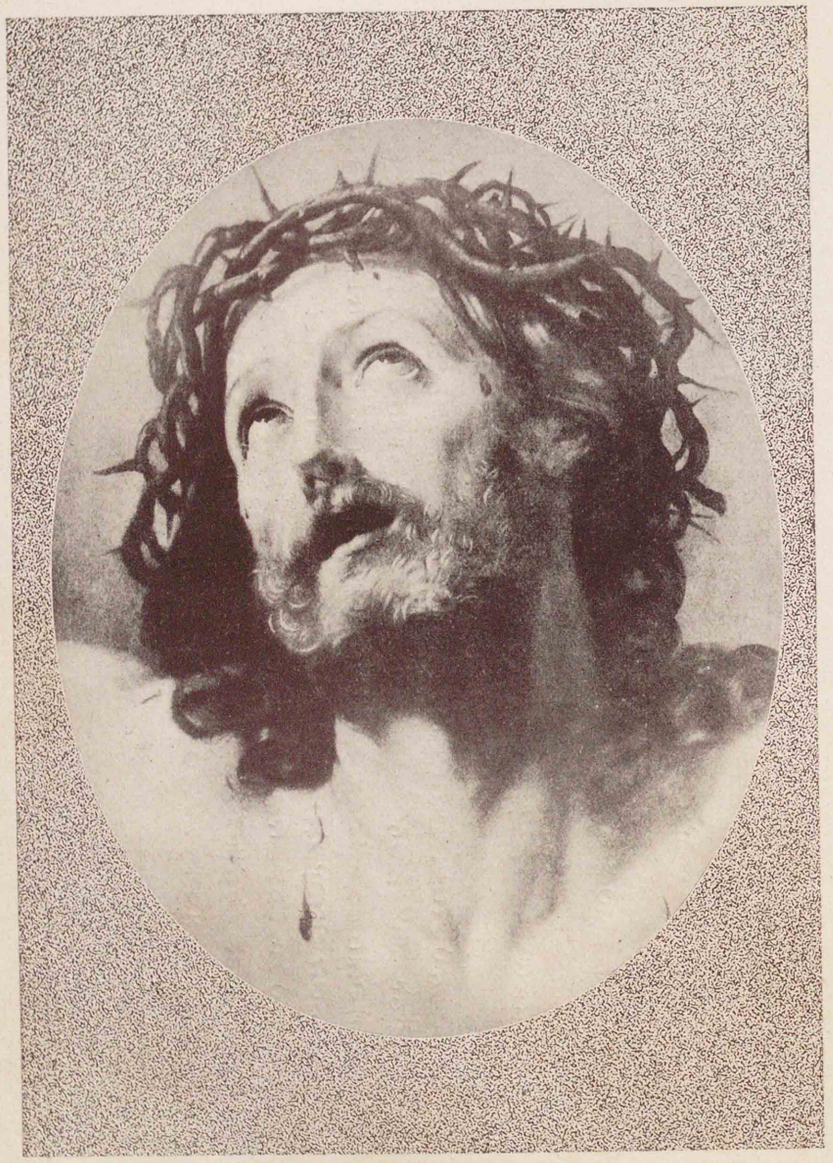
訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信奉せずして異教を剏め、以て人心を惑亂す。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふる所、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲慢不遜なりとして、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死・靈魂・未來のことを說き、人の脫獄を勸むるや、輒ち答へて曰く、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死また何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。その將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一雞を以てアスクレピオスの神に捧げよ。」と。蓋し會、病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしがためならん。ギリシャの聖人ソクラ

アスクレピオス　ギリシャの醫藥の神

テスはかくの如くにして逝きぬ、年七十。

キリストは本名をヤソ〔耶蘇〕といふ。キリストとは「膏灌がれたるもの」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤ〔猶太〕のベツレヘム Bethlehem に生る。その生後四年を以て西暦紀元元年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤと いふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネ〔約翰〕の洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年間、ユダヤの各地を歷遊し、諸々の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。抑、當時はローマ〔羅馬〕帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異尋ぎに至りて、天下寧日なし。特にキリストの故國なるユダヤは久しく暴君の

聖母に抱かれたる幼時のキリスト



荊冠のキリスト

収斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拝して、益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近皆靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等これを喜ばず、以て猥りに新法・異說を唱へて民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこのことあらんを慮り、晏然として騷がず、靜に祈りて曰く、「神よ、彼等を許せ。」彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、我がために哭くことなかれ。たゞ己と己の子とのために哭け。」と。かくの如くして、キリストは三十三年の短命を以て十字架上

キリスト既に囚はれてユダヤ公廳の法廷に立つた。ローマの代官ポンチウス、ピラツスこれを審問して、「汝は何人ぞ。」と問うた。キリストは答へて、「我は王なり。眞理を證さんがためこの世に臨みたり。凡そ眞理に應へ得んものは、皆我が聲を聞かん。」といつた。ピラツスはこの高調な言葉に耳を假すべくもなく、事もなげに、「眞理とは如何なるものぞ。」といつて面を背けた。そこで、兵士等は荊棘で冕を編んで、キリストの頭に冠らせ、また紫の袍を着せて、口々に「ユダヤの王安かれ」と嘲りながら、その頬を打ち、その額に唾した。やがて外に引出された時、ピラツスはキリストを指してユダヤ人にいつた、「見よ、これその人なり。」と。そしてキリストは十字架に懸けられた。

レニーのこの畫は、彼の作品中最も廣く知られてゐる。荊冠を戴いたキリストを見よ。無限の悲哀を湛へたその眼には人類の未來を育むべき慈悲の泉があり、その傷ついた額には世界の暗黑を照すべき眞理の光があり、そして、荊棘に滴る血潮は永遠の祝福に酬いるべき犧牲の印で、正しいもの弱いものの大なる安慰と希望とである。

レニー（Leni）はイタリーの畫家で、ラファエルの手法を學んで名手となり、好んで宗教畫を描いた。1575生—1642没）

の露と消去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教即ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱きて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盗賊と相並びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりといふべし。然れども、是等の人の志すところは天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏然としてなほ歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「我が道行はれずんば、我何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生のために妻子と王位とを抛ちて、食を

路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ。我をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷を醒さざるべからず。」と。キリストは己を罪に陷るゝものために神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の廣大にして無邊なるや。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にもまた多少の差異なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを以てその主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生・老・病・死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

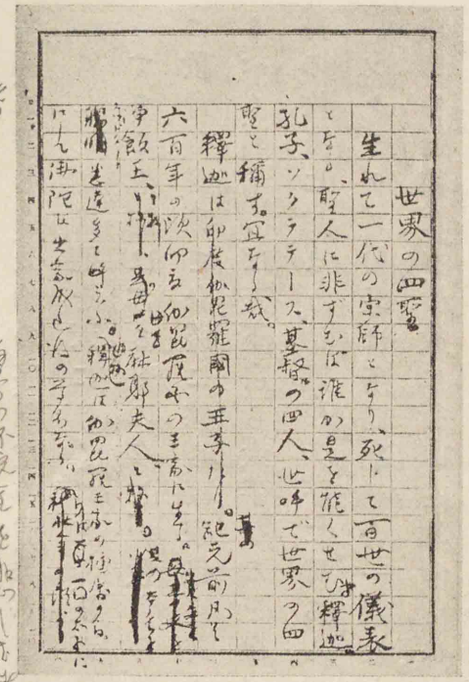
身を修め
古之欲レ明ニ明德於天下ニ者先治ニ其國ニ欲レ治ニ其國ニ者先齊ニ其家ニ欲レ齊ニ其家ニ者先修ニ其身ニ欲レ修ニ其身ニ者先正ニ其心ニ欲レ正ニ其心ニ者先誠ニ其意ニ（大學）

孔子の教は身を修め家を齊へ天下を治むるにあり。而して身を修むる本は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、悉くこれに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うすること能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば國自ら治るべく、國治らば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まり、治國・平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は所謂知德合一說なり。思へらく、「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體なるのみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識・道德の眞正なるものにあらず。眞務となせば、正義自らその中にあり。眞理を確信しその實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の滿足なり。而

山上の垂訓
新約全書馬太傳第五・第六・第七章

して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども、富貴は道德の中にあり。」と。



高山樗牛筆蹟

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、

「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰められべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は神の憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵することなかれ。人もし汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義をその前に行ふことなかれ。右の手に爲すところを左の手に知らしむることなかれ。偽善者の行に倣ふことなかれ、隱れたるを鑑みたまふ神は顯に報いたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非することなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入るものは多し。嗟吁、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、それを得るものの少きぞや。凡そ

この訓を聽きて行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるものは、砂上に屋を架せる愚人の如し。」と。キリストの教の精髄は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記と教義の大要となり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教によりてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりといふべし。その遺德の高大なること、それ何を以てかこれに比せん。（樗牛全集）

土井晩翠
名は林吉、仙臺市の人、明治四年生、文學者、第二高等學校教授

二三　釋尊とト翁

五天の夜半星光る。——

土井晩翠

金殿玉樓——恩愛の
ほだしも固き伽毘羅城
あとに落行く王子の玉貌、
眉間の白毫長く照らして、
魔王魔障の群もひれ伏す。
靈鷲の山高からず。
恆河の水長からず。
高きは靈、長きは餘韻。
末世今皆溷濁の波の狂ひに、
金襴と紫衣と朱殿と幢幡と、
泥に汚れ塵に塗るも何かあらん。
流風とこしへに香を吐きて、

釋尊（釋迦）
ト翁（トルストイ）

白毫　佛の三十二相の一、佛の眉の間にある白い毫、清淨柔軟で光明を放つといふ

靈鷲の山　ギシャクツ山の譯、山中に多くの靈仙が居住し、山形は鷲に似てゐるといふ

二千年前の大獅子吼、
今渴仰の心地に震ふ。

北歐のオーロラ微に光る。
人生八十終に近き、
瞑想の宿ヤスナヤポリヤナ、
顧みれば、豪奢の青春、半醒の壯時、
立たんとして立たず、
覺めなんとして覺めず、
目は大空の高きを仰ぎ、
足は塵土の低きに這ひしも、
落日最後の光照らして、

オーロラ　Aurora、極地の天空に出現する極めて壯麗な光の現象、極光
ヤスナヤポリヤナ　Yasnaya Polyana、モスコーの南にある、トルストイの生地

雲霧を今はの際に斷ち切り、
五天のむかし二千年、
青春の王子王宮を
逃れしあとに遂に倣へり。
嗚呼これ全歐最後の偉靈、
世紀二十の文明の思潮の高みトルストイ。（曙光）

二四　親の愛

西田幾多郎

西田幾多郎　石川縣の人、明治三年生、哲學者、文學博士、京都帝國大學教授

回顧すれば十四歳の頃であつた。余は最も親しかつた姉を失うて、生來始めて死別の悲みを知つた。人なき處に至つて思ふまに泣いた。稚心に、代られるものならば姉に代つて死にたいと心から思つたことを今も記憶してゐる。また明治三十七年の夏には、悲慘な旅順の戰に、たゞ一人の弟が敵壘深く屍となつて、其の

遺骨を收めることも出來なかつた。此の斷腸の思がまだ全く消失せないのに、またこゝに愛兒の一人を失ふこととなつたのである。骨肉の情いづれも疎かなのはないけれども、特に親子の情は深い。余は此の度生來未だ曾て知らなかつた眞に沈痛な經驗を得たのである。亡き我が子の可愛いといふには何の理由もない。たゞわけもなく可愛いのである。

西田幾多郎

「これまでにして亡くしたのはさぞ惜しからう。」といつて悔んでくれる人がある。併し、さういふ意味で惜しむのではない。「女の子でよかつた。」とか、「外に子供もあるから。」とかいつて慰めてくれる人もある。併し、さういふことで慰められるものではない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、「ま

ドストエフスキー　ロシヤの小說家（1821—1881）

た出來るだらう。」といつて慰めた人があつた。すると、氏はこれに答へて、「外の子供ぢや仕方がない。私はソニヤ Sonia が欲しいのだ。」といつたといふことである。

親の愛は純粹である。其の間一毫も利害得失の念を挾む餘地がない。たゞ亡兒の俤を思ひ出すにつけて、無限に懷かしく、可愛く、どうかして生きてゐてくれゝばよかつたと思ふ。老いも若きも死ぬのが人生の常だ、死んだのは我が子ばかりではない。常事であつても、悲しいことは悲しい、飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴であるやうに。「死んだものは何としても還らぬから諦めよ、忘れよ。」といつてくれる人がある。併し、これは子を失つ

ドストエフスキー

いと思へば、理に於ては少しも悲しむべき所はない。併し、人生の

た親に取つては堪へがたい苦痛である。時は凡べての傷を癒すといふのは自然の惠でもあらうが、一方から見れば、それは人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を殘してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔、アーヴィングのスケッチブック(Irving Sketch-Book)を繙いた時、「他の心の疵や苦みはこれを忘れこれを治しようと希望するが、獨り死別といふ心の疵は、人目を避けても、これを溫めこれを抱かうと思ふ。」といふやうな言葉を讀んだ。今になつて誠に此の言葉が思ひ合されるのである。折に觸れ物に感じて思ひ出すのがせめてもの慰藉である、死者に對しての心づくしである。此の悲みは苦痛といへば誠に苦痛であらう。併し、親は此の苦痛の去ることを欲しな

アーヴィング　米國の文學者(1783—1859)

グンィヴーア

死にし子をんな子ともに紀貫之の土佐日記にある語

カント　ドイツの哲學者(1724—18(4)

いのである。

「死にし子顏よかりき。」「をんな子の爲には親幼くなりぬべし。」など

と古人もいつたやうに、親の愛は誠に愚痴である。冷靜に外から見たならば、たわいもない愚痴と思はれるであらう。併し、余は今度此の人間の愚痴といふものの中に人情の味のあることを悟つた。カント(Kant)がいつたやうに、物には皆値段がある、獨り人間は値段以上である、目的其の物である。如何に貴重な物でも、それはたゞ人間の手段として貴重なのである。世の中に人間ほど尊いものはない。物はこれを償(つぐな)ふことが出來るが、如何につまらない人間でも、一つの靈魂であるからには、他の物を以て償ふことは出來ない。そして、此の人間の絶對的價値といふことが、己が子を失うたやう

トンカ

な場合に、最も痛切に感じられるのである。ゲーテが其の子を失つた時、Over the dead（死者以上）といつて仕事を續けたといふが、ゲーテが此の語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたでもあらう。併し、人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない。學問も事業も究竟の目的は人情の爲にするのである。そして、人情といへば、たとひ小さくても、親が子を思ふより痛切なものはなからう。徒に高く構へて、人情自然の美を忘れるものは、却つて其の性情の卑しいことを示すに過ぎない。「征馬不前人不語、金州城外立斜陽」の一詩があつて、愈〻乃木將軍の人格が仰がれるのである。

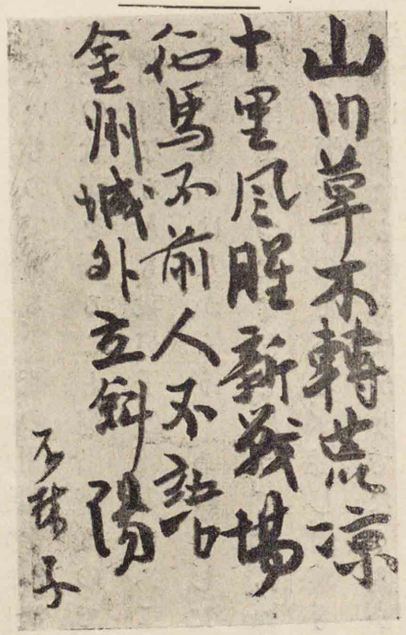
ゲーテ

乃木將軍　陸軍大將乃木希典、山口縣の人、伯爵、大正元年歿、年六十四

とにかく、余は今度我が子の果敢ない死といふことによつて多

山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場、征馬不前人不語、金州城外立斜陽　石林子

大の教訓を得た。名利を思うて煩悶絶間のない心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられたやうな心持がして、一種の涼味を感じるとともに、心の奥から秋の日のやうな清く溫い光が照らして、凡べての人の上に純潔な愛を感じることが出來た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり歌つたり遊んだりしてゐたものが、忽ち此の世から消失せて、壺中の白骨となるといふ事實であつた。若し人生はこれだけのものであるといふならば、人生ほどつまらないものはない。此處には深い意味がなくてはならない、人間の靈的生命はかうまで



乃木希典筆蹟

無意義なものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である。死の事實の前には、生は泡沫のやうに果敢ないものである。死の問題を解決することが出來て、始めて眞に生の意義を悟ることが出來るのである。

如何なる人も、我が子の死といふことに對しては、種々の迷を起さないものはなからう。あれをしたならばよかつた、これをしたならばよかつたなどと、思うて返らぬことながら、徒なる後悔の念に心を惱ますのである。併し、何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く。我々の過失の背後には不可思議な力が支配してゐるやうである。後悔の念の起るのは、自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかやうな場合に於て深く自己の無力なことを知り、己を棄てて絶大な力に歸依

西田幾多郎自署

する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸したやうになり、自ら救ひ、また死者に詫びることが出來る。歎異鈔に、「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん。また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。」といつてある尊い信念の面影をも窺ふことを得て、無限の新生命に接することが出來るのである。（思索と體驗）

歎異鈔　親鸞の著

藤井健治郎　山形縣の人、明治四年生、倫理學者、文學博士、京都帝國大學教授

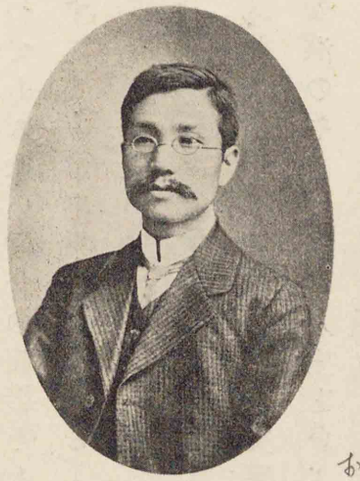
二五　文學と人生

藤井健治郎

文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。

海のやうに廣い人生といふうちに現れた百般の姿相を、盥のやうに狹い表面へさながらに描寫したものが文學である。人生とは何であるか。よく世間では、「吉凶禍福は糾へる繩の如し。」といふが、人の運命は啻に糾うた繩のやうであるばかりではない。あの

大空に横たはつて居る雲のやうに、あるかと見れば消え、消えたかと見れば湧き、海かと見れば山、龍かと見れば虎、忽ちにして淡く、忽ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪することの出來ないものである。たゞこの一片の雲でさへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で更に變化のあるこの人生の波瀾・動搖が、どうして吾等の感興を惹起さないでゐよう。變幻出沒窮まりのないのが人生の姿相である。これが人生であるかと見れば忽ちその姿を變へ、それが眞相かと見ればまた忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易にこれを捉へることが出來ず、凡眼はなか〳〵その眞相を認めることが出來ない。而も捉へることがむづかしければむづ



藤井健治郎

雅邦　橋本氏、東京市の人、畫家、東京美術學校教授、明治四十一年歿、七十四

瀟湘八景　平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晩鐘・漁村夕照

長沙　支那湖南省の都會、洞庭湖の南にある

かしいほど、認めにくければ認めにくいほど、これを捉へたい、認めたいと思ふのは、誰しもの人情である。ところが、詩人はその鋭敏な眼と靈妙な腕とを以て、その認めにくい人生の眞相をしつかりと捉へて來て、それを世人の前に示すのである。これが文學である。そこで、世人は堪らない。自分の熱望の目的物が眼前に現れたから、その視線はこれに吸ひつけられ、觀ても觀飽くことを知らないのである。

私は文學は人生の縮圖であるといふ。その大體の意味は前にいつた通りであるが、なほこゝに一つの疑が殘つて居る。それは外でもなく、その縮圖とはどういふ意味であるかといふことである。雅邦の描いた瀟湘の八景は、あの洞庭湖邊の大觀の縮圖である。また長沙あたりで賣つて居る寫眞もやはり同じ縮圖である。寧ろ寫眞の方は實際の通り、一木一石少しも實際のものと違はず

寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない。精密に見れば、實際に生えてゐない木が生えてゐたり、實際にある巖が省かれてゐたりするであらう。併し、兩者ともにあの美しい壯觀の縮圖であることに於ては同一である。文學は人生の縮圖であるといふ。縮圖はあの繪畫的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か。これが殘つて居る問題である。

この問題は一刀兩斷に答へることが出來る。凡そ文學は必ず繪畫的縮圖であり、またさうあるべきであることは疑がない。なるほど、たゞ縮圖といふ點から見れば、寫眞の方が遙に精密な縮圖であらう。併し、今少し他の點から考へれば、さうではない。凡そ物には要といふべき點がある。その要を捉へさへすれば、その他はこれを擧げる必要もなく、否、寧ろ擧げない方がよい。實際の物には穢い所もあり、醜い所もあり、不完全な所もある。必要以上に

此等の物をも殘らず擧げれば、却つて吾等の感興を害し、吾等の想像を破つて、あの湖邊の美を發揮しようとした折角の努力も失敗に了る。それゆゑ、たゞ湖邊の美觀の肝要な場所を極めて精彩のあるやうに描いて、その他は凡べて觀者の想像に任せる方が、その美觀を眞に發揮する所以である。隨つて美を發揮する方からいへば、繪畫的縮圖こそ眞正の縮圖である。そこで、この人生百般の姿相を捉へて、吾等の美的感興の對象となし、美的趣味を滿足させようといふ文學が、必ず繪畫的縮圖であり、また、さうあるべきことは、殆ど絮說する必要がない。

文學とは何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に苦み惱みのあるのは、「我」があるからである。「我」があるからこそ、限りのない望を起し、限りのない欲を逞しうしようとするのである。「我」があるからこそ、限りのない名聞の奴となり、限

大聖釋迦

りのない黄金の僕となるのである。「我」があるからこそ、憎悪もあり怨恨もあるのである。名聞の奴となり、黄金の僕となり、憎悪怨恨の焔に燃されゝばこそ、この世に苦み惱みがあるのである。菩提樹下に大悟徹底した大聖も、「我」を以て一切苦の根本としたのはこれがためである。若し我執を離れ妄見を脱することが出來たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かになるであらう。さて、吾等をしてこの我執を離れ妄見を脱しさせる所の易行道は何であるか。それは文學に外ならない。吾等が美しい詩や歌を吟詠し、戯曲・小説を玩味する時には、全く一種の別天地に入り、一切の我執・妄見は茲に全く消滅して、讀みゆく自己と讀まれる文學とが一つに融けて差別がなくなりたゞ何とはなしに怡悦滿足の思をするものである。しかもこれは啻に一時の救だけではなく、永く吾等の生涯に影響を及ぼすものである。もとより

分け登る分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな

獨り文學だけでなく、その他の藝術も皆吾等を靈化する力を持つては居るが、音樂なり繪畫なりには割合に專門的技術的要素が多く、誰でもその力に縋つて救濟を得る譯には行かない。ところが、文學にはその要素が少い。その文字と文章とを解することの出來る人ならば、誰でも多少の救を受けることが出來る。これ私が文學は解脱の易行道であるといふ所以である。

凡そ吾等人間を救濟するものは三つある。第一は只今述べたところの文學の力、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀的に救濟しようとし、道德は意志によつて漸進的に救濟しようとし、宗教はその中間に立つて、半面は情により半面は意志によつて救濟しようとするものである。かやうに、この三者は、分け登る麓の道に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見ようとするものである。かう考へれば、その何れの道によつ

て救濟を求めるのもその人の自由であつて、必ずしも己に同じい者に黨して、異なる者を伐つ必要のないことは明かである。ところが、世人はこのことを忘れて、謂はゆる文藝派の人々と謂はゆる道學派の人々とが相鬩ぐやうな愚を演じて居る。併し、かういへば、或は「たゞ文學だけによつて、若しくは道德だけによつて、果して人格全體の救濟が得られようか。」と問ふものがあるであらう。私はそれは必ず可能であると信ずる。凡そ眞に美なるものは必ず善を兼ね、眞に善なるものは必ず美を含んで居るものである。善を兼ねない美はなく、美を含まない善はない。これは必ずしもヘラス民族の經驗ばかりではなく、また吾等の親しく經驗する所である。それゆゑ、眞に美なる文學によつて救濟されるものは人格全體の救濟であり、眞に善なる法則によつて救濟されるものもやはり人格全體の救濟である。

ヘラス　ギリシャをいふ

文學とは何であるか。文學は人生の力である。

將に寃罪の刃の下に無殘な最期を遂げようとした禪僧祖元が、纔に生命を全うすることを得たのは、果して何の力によつたのであらう。それは、彼が死に臨んで泰然として吟詠した一絕の力ではないか。幾多愛國の志士をして感奮興起させた東湖の正氣歌は、今日でもなほ凛として生氣があり、眞に懦夫をして起たせるがあるではないか。徒に理想に憧れて、年老いた父母にさんざんの歎を見せ、後でやつぱりその父母が慕はしくなつて現實界に還つて來た新曲浦島の太郎は、幾多熱血の湧きかへる青年に向つて、理想は現實を離れるべきでなく、たゞこの現實界をさながらに淨土と觀じ極樂と化すべきものであるといふ信念を鼓吹したではないか。涙に沈む婦女、貧に苦しむ青年をして、再び生氣を呼起して蘇生させるものは、凡べてこれ文學ではないか。文學は人生の力

祖元　支那宋代の人、弘安二年渡來し、圓覺寺の開山第一の祖となつた、弘安九年（一二八六）歿、年六十一

東湖　藤田彪、水戸藩の儒者、勤王家、安政二年（一八五五）歿、年五十

である。この力を得、この力を利用しようとし、この力によつてその天福に與らうとする努力は、凡そ人間の努力の中にあつて、最も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家がその力を利用して自己の信ずる所の福音を傳へ、政治家がその力を利用して經世濟民の具としたことは、古今東西とも決してその例に乏しくない。

實に文學は人生救濟の具として道德・宗教と並び立つものである。隨つて彼等の間には互に聯絡交通する所がある。そして、文學の力が最も直接にその影響を及ぼす方面は道德の方面である。今、文學創作者の立場からでなく、社會現象の一つとして文學を見ればその影響は、直接または間接に益〻道德を助け道德を高尚にするか、若しくはその反對に、直接または間接に道德を破り道德を墮落させるかといふ問題に歸着する。

かやうに、いろ〳〵の影響があるから、文學の批評も見る人によつて違ふ。老人は、「近頃の小說は實に風敎を害することが甚しい。あれは絕對に禁止せねばならぬ。」といひ、青年は、「美は美である、風敎と藝術とは世界が違ふ。」といつて、現代の作品を歡迎する。いかにも青年のいふやうに、美には美の繩張があるから、一概に風敎云々を以てこれを律することは出來ない。さうかといつて、現代の作品ばかりを追つて、更に高尚な作品のあることを忘れるのもまた贊成することが出來ない。文學と風敎との關係問題は、理想境に達しない現實の人生に於ては、つまる所、一時の社會政策上の問題である。現今の道德に悖戾するやうな文學を禁止するのは、政策上已むを得ないことであらう。併しまた、一般讀者の趣味が漸々微妙に漸々高尚になるならば、文學上の作品も漸々理想に近づくであらう。理想は善美一致の境にあるものである。（時代思潮）

二六　秋姿の瞑想

綱島梁川

杉の梢高く離るゝ秋の空、何ぞ超脱の氣象饒かなる。一念の塵を止めざる秋の潭、何ぞ淵默にして智慧を藏するの深き。星を洞觀の眼と開き、雲を葛巾の帽と戴き、紅蓼・白蘋の裳裾輕げに、あるは樹間の聲を弄し、あるは獨り瀨氣流るゝ空明の野を行く。げに秋の姿ぞ哲人・道士の高姿なりける。見よ、その衣を。尾花が波、錦の杜・桔梗・かるかや・女郎花、さては芙蓉・紫苑・藤袴のいろ〳〵に染めいづる彩のかず〳〵目もあやなれど、あはれ、春草の靡蕪、夏木の鬱蒼と比して、何ぞその楚々として、譬ふれば、一衣の羅穀婆娑たる道士の羽衣に似たるぞや。聽け、その聲を。滿野雨降るが如き虫時雨は幽思・遠情の心耳を澄ましめて、微妙の法音を聽くが如く、若しそれ鏘々として金鐵皆鳴る風聲・樹聲・天籟・地籟は、直ちにこれ哲人の豫言、禪士の喝語として、我等が念々の觀省に資するものなからずや。秋を仰いで先づ想ふは哲人の姿なり。

哲人の世界は觀念の世界なり。積水の碧を湛へたる氣海、月光の清輝に漂へる露華、白葦・黄茅の丘野、蘆花・淺水の江湖、いづれか秋は空明一氣の中を流れざる。山の阿、水の涯、到るところ寸翳の目を遮るものなく、によつぽりと浮び出でたる山、美しうくねり行く川、凡べてこれ晶明、凡べてこれ澄澈。げに万有は秋に至つて一個の觀念世界を披展するなり。あらゆる形式、あらゆる徽號の衣を脱捨てて、直ちに觀念そのまゝを赤裸々に露呈し來る。自然は秋に至つて復び思想に還るなり。万有は觀念と化して秋を流る。春霞の帳、夏林の被を剝去つて、些の窒礙なく、抑塞なく、塵なく、翳りなく、一氣玲瓏

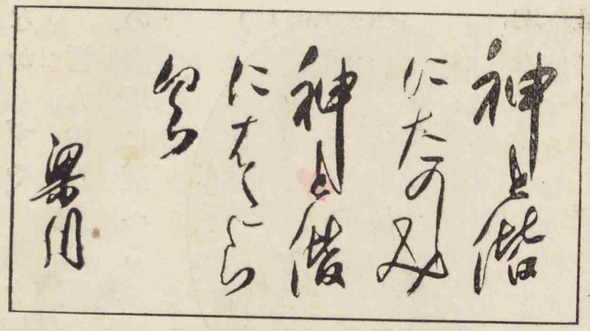
綱島梁川

として透澈せざる隈もなし。

あらゆる形式・徽號の薫染を離れたる觀念如實の秋の姿は、一面また實在の躍々人に迫るの姿なり。げに秋はその觀念化せる明瑩の姿を以て人を壓し來る。おぼろに映る醉眼の春の月、あるは菜の花隱れ打霞み行く春の水の美、假象の世界は此處になくて、蔦紅葉の中より露はるゝ節くれだちし樹身、枯芝生より躍り出づる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫る實在の力を示さざる。人は秋に於て事實と面相接するなり。黄橘・赤柿の累々として夕空に結び出でたる、何等力ある觀念の表出ぞや。

自然の万象、秋に入りて春草・夏木の形式

神と僧にたのみ神と僧にはたらく　梁川



綱島梁川筆蹟

より直ちに觀念の世界に還るが如く、我等も亦秋に入りて一切の虚飾・形式を脱し、眞我本然の聲に還らんとす。自然の眞我と吾人の眞我とは、秋に於て復び舊相識の如く一源如々の境に相逢ひ相當らんとす。空を仰げば、闌干たる星斗直ちに手もて捫すべく、水に臨めば鑑明下徹して、鬚眉一々に明かなり。彼、我か、我、彼か。されば、春の花は痴重にして言はねど、秋の星は明瑩にして神の言葉を傳ふ。げに秋は融會・神交の季なるかな。我等が十重二十重の虚僞の我を剝去つて、湧出づる秋の石清水の眞心もて感應の對象に憧るゝはたゞこの時にあらんか。而してかゝる美しき神交の反響は獨り秋の世界にありてのみいと亮に響くなり。秋は脱我の季、融會の時なり。友を友と、人を天地の父と、おの〳〵純眞の我を打拔きて感應應化せしむる秋の力ぞ偉大なる。眞に秋の力を感ずるものの前には、脱我感應の門開けたり。而してこの境はや

がて哲人常住の棲遲、神的祝福の一境にあらずや。春を快樂に擬し、夏を幸福に比すれば、秋は正しく祝福なり。春は感應的・美的、夏は活動的・倫理的、秋は精神的・宗教的。若し冬をも加ふれば、一切活動の充實して被動的となれる大涅槃の面影、これを彷彿するに足るべし。

我等が哲人秋の太虛の意識を仰ぎ見よ。いづこにか一點妄念の翳りを着けたる。若しかゝる翳りのありとせば、そは遙かなる地平線上に罪業の名殘かすかなる斷雲の一片二片のみ。而してそれだにやがて孤行しつゝ低迷しつゝ消行くなり。哲人の清襟時に罪業の雲の徂徠せざるにあらねど、そは倏ちにして一碧の心に沒し去つて、また何等の累をも留めざるなり。万象を碧落の意識に裏みて、執せず惑はざる剛明一氣の姿は、我たゞ秋の太虛にこれを仰ぐなり。嗚呼高いかな秋の品性。

煙の如き豐草の春に引換へて、秋野といへば人目も枯れ〳〵なるうらぶれ姿まづ目に浮べど、あはれ、枯井・斷礎も千草の秋と生ひ亂れたる野邊の一日の暖かさ華やかさは、また一入の風情ならずや。寢よげに見ゆる若草の媚態はなけれど、秋野の溫情は譬へば、さだすぎたる婦の、操高く心すゞしく、歸依・慈愛の性深きにも似たるかな。想へば、我尾花が秋の懷に抱かれて、えならぬ氣海の句を身にしめつゝ、孤懷坐ろに遠くに騁せしをり〳〵、一種言知らぬ懷かしさに心動きて、涙下りしこと幾たびなりし。而して、我記す、そは極めて愉しき涙なりしことを。げに天地の溫情は秋の野にこそ高く脈うつとは知らるれ。秋野は哲人の瞑想生活の半面なり、そが溫情生活の一面なり。（梁川文集）

自修文

二七　綱島梁川氏を弔ふ

石川啄木

石川啄木、名は一、岩手縣の人、文學者、明治四十五年歿、年二十七

予の札幌着後僅に數日、秋意は既に深く、吹く風の冷たさに身も心も緊り、胸の憂も吹拂はれて、何かは知らず深い問題の數々に心が向いて行つた。此の時に當り、突如として秋のやうな悟入の人綱島梁川氏の訃報に接した。曰く、「綱島榮一郎儀、養生不相叶、昨夜十二時遂に永眠致候間、此段御通知申上候。」

死は由來最も赤裸々な事實である。併し、此の赤裸々ほど永劫に解き難い祕密が他にあらうか。今、世は秋である、飾もなく僞もない赤裸々な秋である。此の赤裸々な秋の中に躍る生命の面目も亦永劫に解き難い祕密ではなからうか。予は今此の訃報に接して、大いなる斧を以て頭を擊たれたやうな氣持がする。――特に予は故人の友の中の哀れな一人である。梁川氏は實に予の爲に師であり恩友であつた。――予の短い過去の中には、故人の深い同

情の外には、何物も心を動かすことの出來なかつた時代さへもあつたから。

僭越　分を越えること

やるせない悲みが潮のやうに胸に湧いて、今我が心は聲も立てず泣いて居る。氏の死を聞いて悼まぬ人はなからう。一度氏の名を知り氏の文を讀んだ人は、今皆一樣に氏の爲に哭して居るだらう。併し、予は何故か、氏の爲に眞心から泣くのは、廣い世界に予一人だけであるやうな氣がする。かういふのは或は僭越であるかも知れぬ。たとひそれが僭越であつても、予はさう感じないでは居られぬ　恐らく予の此の心持を解する人はなからう。併し、氏の在天の靈だけは、必ず予の此の心を諒とされるであらうと信ずる。氏は生前癒えぬ病の床に臥しながら、筆を執つて一代の求道者を導かれた。其の沈痛で幽遠な情趣の裕かな文を以て、說き難く示し難い言外の理を說いて、常に讀む人の心に新しい力を與

へられた。併し、予は決して其の說によつて氏に歸依したのではない。予が氏の說に服し難い理由は、嘗て氏に書送つたことがある。文章は人格の發露である。併し、氏の文章そのものは氏の全人格ではなかつた。氏の人格は崇高であつた。人格が崇高であつたから、氏はよく靈界の偉人として、其の文によつて一代の人心を動かされたのである。予は氏の說に全くは歸依し兼ねながらも而もなほ氏の前に跪くことを辭しなかつたのは、實にかういふ予自身が、深く氏の人格の光に溫められ、其の潮のやうな同情を宛然法惠の雨露のやうに身に浴びたからである。予が氏の死を悼む心が他の何人よりも一層深刻であることは、少くとも氏だけは諒とされるに違ない。これは予自身に於ては決して僭越でもなく放言でもない。予は今玆に氏の說を是非し評隲しようとは思はぬ。よしや氏の說を是非し評隲して妥當な結論を得たとして

評隲（しなさだめ）

も、それは氏と予との溫い心の交に何の增減も及ぼさぬことである。予は唯予の心の中にあつて、永劫に死なぬ氏に對して、予の思を述べれば足りるのである。

懷へば二歲餘の昔である。明治三十八年五月中旬、塵の都の煩はしい生活に倦果てて、漫ろに行く春の故山の空や、曉の林に鳴く閑古鳥の聲の忍ばれる頃、新に梓に上せた「あこがれ」の一卷を懷にして、予は氏を其の寓居に訪れた。故鄕の禪房で、藥餌を友としながら、白蘋の花を浮べた水鉢の前に氏の文を愛讀した頃から、何時か一度は親しく謦咳に接したいとは思つてゐたが、取りわけ、京に入つて後幾日目、林外前田君を訪れて、氏の手紙――予が前田君の雜誌に寄せた詩を批評されたもの――を見せられて以來、一層其の情を深くしてはゐたものの、大久保余丁町といへば東京の邊鄙、身世の匆忙に追はれて寧日のない身には、此の時まで氏の門を叩

梓に上す（出版する）

謦咳に接す（御目にかゝる、謦咳はしはぶき、せきばらひ）

林外（名は儀作、兵庫縣の人、明治元年生、詩人）

寧日（やすらかな日）

く機會がなかつたのである。空の晴れて溫い此の日、騷がしい電車の響も聞えぬ氏の寓居を始めて訪れたのである。

玄關に立つて案內を乞ふと、氏の令弟建部氏が慇懃に取次に出て、「病室ででもお構ひがなければ。」と請ぜられて、裏庭へ廻つた。皐月の日光は廣くもない庭の靑葉を照らし、何となく初夏の匂の心地よさに、先づ胸はすがくしく、籬に咲殘る山吹の花を數へて、廻緣に上つた所、障子の中で打沈んだ咳の聲が聞える。室は六疊敷の塵一つない淸らかさ。主人の君は白布で掩うた寢具の上に半ば起き上つて、積み重ねた蒲團に凭れて居られた。あはれ十年病臥の人、肉落ち骨瘦せて、透通るばかり蒼白い頰には、幽に紅の色がさして居る。これが胸を病む人の習であるとか聞く。組合せた細い指に目を落しながら話される言葉は嗄れて居る、深い湖の底に沈んだ古鐘の音のやうに嗄れて居る。不圖面を擧げられると、

醍醐味
美味

予の心の奧までも照らすかと見える雙の目の輝きよ。千万無量の慈悲の光が溢れて居る。目前此の崇い人に接した予は、身も世も忘れたやうな心地がした。其の後、予は如何に此の世の煩はしさに心惑うて泣く時でも、此の時のことを追想すると、言知れぬ敬虔の念に打たれて、何となく心安さを覺えるのである。

二人の話題は主として詩と宗教のことであつた。「基督の詩」を說かれた人、詩から神に行き、神から詩に行つて、眞信の醍醐味を味はれた人に取つては、詩と宗教とは遂に二つのものではなかつた。學者・博士と云はれ、一代の先覺者と云はれる人の中にさへ、眞の詩の一篇さへ味ふことの出來ぬ者の多い世に、詣り深い此の人の言葉の節々は、如何に年若い予の心を動かしたことであらう。日影暖い障子を明け放せば、靑葉を渡る風が疊の上を辷る。話頭は更に進んで、或は深い寂寥の中に我と我が心に親しむ世外の歡を語

り合ひ、又予の詩に關して嬉しい助言の數々を垂れられた。そして、氏自身のことに就いて最後に言はれた語は次のやうであつた。

――「我明に大いなる神の心を感じたり。神を感じたる者は自己の尊き使命を自覺せざるを得ず。我如何にして我が使命を現すべきか。我今病あり、起つ能はず、行ふ能はず。乃ち唯一管の筆を以て此の使命を世に傳ふべきのみ。これ我が唯一の神に負へる務なり。神の恩惠は深く且大にして限りなし。我が心はいと安らかなり。」

「掲(ケテ)梁川先生之病室(ニ)禁(ズ)(ニ)喫煙長座(ヲ)。主治醫香村生」と題した長さ一尺ばかりの杉板が柱に掲げてあつた。予は、程なく、此の敬虔な靈界の征服者が、血を吐く病に臥しながら、十年一日のやうに、神の恩寵に勇む道場、殘んの山吹が籬に散る靜かな病室を辭した。そして、生返つたやうな新しい歡を胸に藏して、其の後二日目か三日目

歸去來辭　支那晉代の詩人陶淵明の作

杜陵盛岡

の霧冷かな曉に、歸去來辭を吟じて飄然と都門を去り、岩手山の麓の人となつた。あはれ、あの日の短時間の面會、それこそ實に予と故人梁川氏の交に於て、最初の、そしてまた最後の面會であつたのである。

歸つて來て、居を杜陵城下に卜(ぼく)して間もなく、一夜氏の夢を見て何となく心が安からず、直ちに書を裁して安否を問ふと、「小生が大兄の夢に入りし日、恰も咯血のことあり。本日漸く筆を執るほどに相成り申候。一種の靈的感應に候べし云々。」といふ返事が來た。靈的感應の語、之を梁川氏の語として聽くに於て、始めて予は深く感ずる所があつた。此の後一年ばかりの間、予も亦健康が衰へ、剩へ一身内外のことが甚しく予の心を痛めて、予は殆ど朝夕を分たず、魂を苦い涙の中に浸して、人知れぬ煩悶に骨も肉も刻(きざ)まれるやうな思を嘗めたが、思餘る時々には、必ず筆を嚙(か)んで心の數々を梁

川氏に訴へたのであつた。氏も亦常に喜んで、予の爲に貴重な時間も惜しまず、溢れるばかりの同情を傾けて、返事を惠まれた。予が曩に「故人の同情の外には、何物も心を動かすことの出來なかつた時代さへもあつた。」といつたのは、此の當時のことである。其の内に予の「あこがれ」を詳細に批評された手紙も貰つた。これは雜誌「小天地」に掲げておいた。

澁民　岩手縣岩手郡、作者の生れた村

昨年の初、予は弱り果てた心身の健康を養はうとして、生立の記念の多い澁民の林中に人知れず隱れてから、互に消息も打絶えてゐたが、今年の年賀狀には、「小生の病狀も宜しき方に候間、御安心被下度候。」といふ喜ばしい音信があつた。五月津輕の海を越えて函館の人となつて以來、暇ある毎に起居を傳へてゐたが、當時の予の詩を評して、「一誦して哀調人に迫る云々。」と書かれた葉書こそ、今となつては、予が貰つた氏の最後の水莖の跡となつてしまつた。そして、札幌に入つて僅に數日、まだ一葉の葉書さへ出さぬ内に、何としたことぞ、我が懷かしい氏が長への眠に入られたとの通知に接しようとは。氏と予とは今や幽明境を異にした。あはれ、我が此の心を秋風に託して、抑、奈邊の天に告げようぞ。窓の外、風は長く、草は亂れる。世は恰も秋、我が眼はいとゞ曇るのである。

噫、我が梁川氏は遂に此の世を去られた。今の世に於て、多少宗教とか文學とか哲學とかに心を入れて居る者で、我が梁川氏の名を知らぬ人はあるまい。既に其の名を知つて、まだ其の文を讀まぬ人はあるまい。既に一度でも其の文を讀んで、まだ我が梁川氏を慕はぬ人はなからう。實に氏の深沈な確信と、明徹な思索と、引緊つて溫味のある文章とは、如何に瀆れた人の心にも、必ず一味安心の凉風を吹込まねば已まぬ力を有して居る。世は過渡の時、人は彼方に往き此方に還り、迷は迷を生んで、一代の風潮は其の歸趣

を知らぬ時、「一切の眩惑を洗ひ落した赤裸々の靈魂を以て、靈魂の在處を探れよ。」と叫ばれたのは、即ち我が梁川氏である。精神的に墮落しようとする人を覺醒させて、疲れた足を休めるべき樹蔭を教へ、渴した喉を潤すべき清水を與へられた恩人、秋風のやうな深沈な聲を以て人心を吹清められた哲人、敬虔な人生の戰士、一代の先覺者であつた氏に對して、甚深な敬意を拂はないでは居られぬ。己を空しうして人を充たし、己が信じて世の第一の寶とする物を凡べての人に得させようとされた氏の心は、少くとも故人と世を同じうした予等の永く心に銘して忘れぬところである。

予は氏の深く大きい人格の前には、宛然廓寥（くわくれう）たる秋天を仰ぐやうな心地を以て跪いたものである。荒野の花が夏の雨を喜ぶやうに、予は氏の溫い同情には喜んで浴したものである。予は氏に對し、師と呼び、兄と呼び、親しい友と呼び、我が諸友の中の最も大き

廓寥　ひろい大空

い一人と呼ぶ。そしてまた、氏の文を讀むに當つても、最もよく同情し、最もよく解する一人であることを信ずる。

氏と予とは、其の持する見解に相違があるにもかゝはらず、其の交には遂に何の障りもなかつた。氏は何處までも予の大きい友であり、予は何處までも氏の哀れな友である。予の大きい友は既に此の世を去られた。取殘された哀れな友は、今己が心に刻まれて永劫に死なぬ友に向つて此の言をなすのである。友の永眠は九月十四日の夜十二時であつたと云ふ。十四日は予が始めて此の秋風の鄕札幌に入つた日である。予が北の都の第一夜の夢を結んだ時、友は永久に覺めない夢路に辿り入られたのである。人の世の三十五歲、人はいざ知らず、氏には決してそれが短かつたとは云へぬ。既に久遠の世界に入られた哲人梁川氏にあつては、地上の五年十年は畢竟何するものぞ。氏は明に生死の問題を超越

した達人であつた。取殘された哀れな予は、今辛くもかう考へて自ら慰めて居る。（啄木遺稿）

二八　理想と實現

阿部次郎
山形縣の人、明治十六年生、哲學者、東北帝國大學教授

一

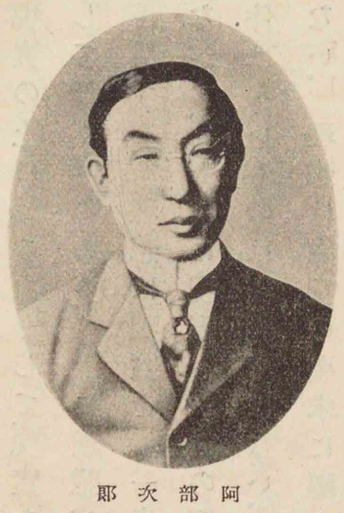
或種の思想は、その本來の性質上、主觀内に於て、若しくは客觀の世界に於て、或種の狀態を實現するの要求として現れる。吾人は普通此の如き特殊の思想を呼んで理想といふ。理想は常に現實の上に臨む力としてその實現を求めてゐる。現實に對して實現を迫る力のない理想は詠歎に過ぎない、空語に過ぎない、饒舌に過ぎない。故に實行とならない思想は無價値であるといふ言葉は、その意味を限定して、實現されない理想は無價値であると解すれば、その内容は遙に鮮明妥當なものになる。

併し、人のよく言ふやうに、――そして、トルストイも嘗て言つたやうに、――實現されたものは理想ではない。理想は實現されると共に理想ではなくなる。理想の理想である所以は、それが常に現實の上に懸る力として、現實を高め淨める力として、現實を指導して行く所にある。故に理想が理想である限りは、それは現實と矛盾する。理想は現實を歩一歩に淨化して、これを己に近接させながら、而も常に現實と一歩の間隔を保つてゐる。實現の要求を伴はないものは理想ではない。實現されたものもまた理想ではない。理想は實現の要求に驅られながら、まだ實現されない處に存在するのである。

故に實現されない理想は無價値であるといふ言葉は、茲に再び改鑄する必要がある。既に實現されたものは理想ではない。實現を求める切な要求を伴はない理想こそ、實現に向ふ内的必然性

を含まない理想こそ、無價値であるのである。實現されない理想が無價値であるなら、凡べての理想はその本來の性質上悉く無價値なものにならなければならない。

實現の結果を重視するものと、實現の意志を重視するものと、この二つの相違は人生の見方に非常な逕庭を生ずる。前者から見れば、まだ結果に到達しない理想は凡べて無價値である。まだ實現されない理想を主張するものは僞善者である。併し、後者の立脚地から見れば、まだ實現されず、まだ結果に到達しない理想でも、やはり理想として特殊の價値を有する。この價値を證するものは、未來を洞察する豫感の力である、實現の要求を煽る現在の心熱で



阿部次郎

ある、刹那々々に新生面を開展して行く現實の進歩である。

大なる理想を有するものは、その理想が刻々に自分の內面に作用する力を感ずるであらう、その理想を實現するの困苦を沁々と身に覺えるであらう、そして、征服し盡されず、淨化し盡されず、高揚し盡されない自分の現實に就いて、堪へ難い羞恥を感ずるであらう。而も直接內面の心證があるから、この屈辱と羞恥の感情を以てしても、なほその理想を抛擲することが出來ない。矛盾と苦痛と自責と屈辱を耐へ忍ぶことは、理想を負ふものの避けることの出來ない運命である。

併し、理想を負ふものの苦みを嘗め知らないものは、この間の悲痛に就いて同情を寄せることが出來ない。彼等は輕易に理想家の內に行はれる理想と生活との矛盾を指摘して、直ちに理想そのものと理想家その人とを否定する。故に理想家は內面的矛盾の

苦みの外に、社會の罵詈と嘲笑をも忍ばなければならない。トルストイの一生の如きは實に理想を負ふものの代表的運命である。多かれ少かれ理想を内に有するものは、トルストイのやうな運命に直面しなければならない。

逃げようと欲するものは逃げよ。逃げようと欲しても逃げ得ないものは勇しくこの悲痛な運命に當らなければならない。

二

理想は、その現實の上に、事實現在の上に、百歩を進めても構はない。理想が潑剌たる要求の性質を失はない限り、理想は高ければ高いほど、その現實に作用する力が峻烈となり痛切となるであらう。隨つて現實は益〻根本的に高められ淨められるであらう。

併し、大なる理想に堪へる心は、また現實の卑しさを視るに堪へる心でなければならない。大なる理想はその生活の上にしつかりと根を卸して、丹念に誠慤に現實の卑しさを淨化する努力を指導しなければならない。大なる理想は先づ現實の眞相を看破して、そこに第一の基礎を築かなければならない。そして、生活の進歩を一足先に見越して、まだ空である處にその基礎を据ゑようとしてはならない。理想と現實の距離に對する鋭敏な感覺は、理想の淨化作用を潑剌のまゝに保つための第一要件である。この距離の感覺を失へば、吾人は自分の生活に嚴峻な鞭撻を加へることに疲れ、漸く現實に媚びて、慢心に陷らうとする。併し、大なる理想に堪へることは、その人格の潜在性の大きさを證すことにはなつても、決してその人格の現實性の大きさを證すことにはならない。

優れた人はいふ、「飛躍せよ、飛躍せよ。」と。茲に所謂飛躍とは本質の飛躍であつて自意識の飛躍ではない。躁急な飛躍者にあつては、自意識が飛躍して、本質が取殘される。そして、飛躍した自意識

と取殘された本質とは、中に横たはつてゐる罅隙を隔てて、茫然として相對する。自意識の飛躍は餘りに輕易で、餘りに人に親しい。眞正の飛躍を望むものは、本質が飛躍すべき力の充ち溢れるまで堪へ忍んで待たなければならない。

基督は曰ふ、「終まで待つものは救はるべし。」と。惡魔は曰ふ、「終まで待つものは腐るべし。」と。

三

理想は何物かを否定する。何物をも否定しない理想は理想ではない。固より玆にいふ否定とは存在を絶滅することではなくて、存在の意義、存在の原理を更新することである。即ちこれを破すると共に、これを高めこれを保存するものである。凡べての理想はこの意味に於て常に何物かを否定する。

人生に於ける一切の惡と醜は、凡べて存在の理由を持つてゐる

ものかも知れない。惡と醜を絶滅しようとするのは、畢竟神の世界を侮辱する無用な努力であるかも知れない。併し、自分は惡と醜が、惡であり醜であるものの立場そのまゝに肯定されるべきものであるとは、どうしても考へることが出來ない。この世には、單純に自分一個の便宜のために他人を陷れるものがある。自分はこの種の讒誣者の行爲を彼等の立場そのまゝに是認することはどうしても出來ない。自分は彼等の存在を見て悲憤する。自分は彼等のために損はれるものを見て涙を流す。此處に自分の全人格的存在がある。若し此等の惡と醜を否定することが出來ないとすれば、自分がこの世に存在するのは、世界の原理と矛盾するの誤謬に違ないと思ふ。

否定されるべきものは決して自分の外にだけあるのではない。到底許すことの出來ない惡と醜が、自分の心を洞察するべく

してゐる。自分は自分の中に巣くふ悪と醜を見て、羞恥の爲に飛上らないではゐられない。この悪と醜を現在のこのまゝで是認することは、自分の全人格がこれを容さない、如何なる強辯を以てしても、自分の存在全體がこれに反抗する。自分は全心の憎悪を以てこれを擯斥する。固より如何にこれを擯斥しても、自分の悪と醜は容易に絶滅しない。併し、自分は心からこれを恥ぢる。そして、これを恥ぢることによつて、自分の悪と醜は一段の淨化を經た、自分の悪と醜は少しく人間らしい「缺點」にまで高められた。これを恥ぢるのはこれを否定するのである。これを否定するのは、自分の全人格が悪と醜の立場にゐないことを證すのである。そして、全人格の立場を高い處に定めたために、悪と醜もまた少しく淨められた。羞恥の誠を以て包むことをしないで、悪と醜を是認することは到底考へ得られない。此の如きは全人格の經驗に反

する空華な思想である。

優れた人の立脚地からすれば、神の世界に於ける一切の現象は凡べて肯定されるべきものかも知れない。併し、一切の現象が肯定されるのは、一切がその優れた立場によつて淨化されたからである。換言すれば、その優れた立場によつて下層の立場が悉く征服され否定されたからである。凡べての「あるもの」はこの優れた立場によつて益〻輝いて來るであらう。併し、幾多の「見かた」「考へかた」「感じかた」はこの立場によつて否定された。故に、如何に一切を肯定するものでも、野卑・奸譎・柔媚・陰險をば拒斥しないではゐられない。此等をも併せて肯定する途――否定を經ないで肯定する途――もあるかも知れない。併し、その途は現在の自分に取つては全然理解を絶してゐる。

理想は吾人の本質から生れて、吾人の現在を超越して、現實の上

に淨化の力として作用し、最後に現實を永遠に渡さうとする。一切の立脚地が征服され、一切の存在が肯定されるやうになれば、理想は最早その任務を果したのである。その時こそ、凡べての價値は現實となつて、吾人は無理想の自在境に入るであらう。併し、それまでは、久遠劫の後までは、理想は常に吾人を苦しめて、吾人の本質を精練淨化する、吾人の生活に矛盾を拵へて吾人の生活を開展させる。（三太郎の日記）

現代國語讀本　卷九　終

現代國語讀本

大正十二年十一月廿七日印刷　大正十二年十一月三十日發行
大正十三年一月一日訂正再版印刷　大正十三年一月四日訂正再版發行
大正十五年十月二十日修正三版印刷　大正十五年十月二十三日修正三版發行
昭和二年二月一日訂正四版印刷
昭和二年二月四日訂正四版發行

現代國語讀本
卷一—二金四拾七錢
卷三—六金四拾六錢
卷七—十金四拾參錢

著作者　八波則吉
發行者　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社東京開成館　代表者　松本繁吉
印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井修平
西部販賣所　大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町七番地　林平次郎

發行所
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社東京開成館
振替貯金口座東京第五三二二番

（電新堂印刷）

檢印

№5
本村信德

東京帝國大學圖書館藏

広島大学図書
2000090697

文庫
27
697